国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和51年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001204

昭和51年度

国立国語研究所年報

—28—

国立国語研究所

1977

刊行のことば

ここに『国立国語研究所年報—28—』を刊行する。本書は，昭和51年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものである。

昭和51年度には，日本語教育部が新たに日本語教育センターとして組織を改め，また，研究所の管理部門，図書館，講堂及び日本語教育センターのための新庁舎が落成した。

本年度の研究を進めるに当たっては，地方研究員をはじめ，各種委員会の委員，各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得た。また，調査について，各地の県及び市町村教育委員会，学校，幼稚園等の諸機関の御配慮を仰いだほか，本年は特に日立市で日立製作所関係の工場に，企業内に立ち入っての調査を許された。巻頭に一言して，深謝の意を表する。

昭和52年7月

国立国語研究所長

林　　大

目　　次

刊行のことば
昭和51年度の調査研究のあらまし …… 1
昭和51年度刊行報告書の概要 …… 9
現代語文法の記述的研究 …… 12
現代語彙の概観的調査 …… 14
敬語の社会的研究 …… 16
現代語の表現の文体論的研究 …… 21
所属集団の差異による言語行動の比較研究 …… 23
各地方言親族語彙の言語社会学的研究 …… 25
発音過程に関する研究 …… 28
図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究 …… 29
「各地方言資料の収集および文字化」のための研究 …… 31
各地方言文法調査の準備的研究 …… 35
明治初期における漢語の研究 …… 36
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 …… 38
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 …… 42
漱石・鷗外の用語の研究 …… 47
現代語の表記についての調査研究 …… 49
高校教科書の用語用字調査 …… 51
日本語の対照言語学的研究 …… 55
日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究 …… 57
日本語教育の内容と方法についての調査研究 …… 59
日本語教育教材および教授資料の作成 …… 61
日本語教育研修の実施 …… 64
国語および国語問題に関する情報の収集・整理 …… 69

科学研究費補助金による研究 …… 78
図書の収集と整理 …… 85
庶務報告 …… 86

昭和51年度の調査研究のあらまし

研究所の機構は次のとおり（52年３月31日現在）。

- 評議員会
- 所長
  - 庶務部
    - 庶務課
    - 会計課
    - 図書館
  - 言語体系研究部
    国語の体系に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      現代語の文法体系に関する調査研究
    - 第二研究室
      現代語の語彙体系に関する調査研究
  - 言語行動研究部
    国民の言語使用に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      現代語の表現およびその伝達効果に関する調査研究
    - 第二研究室
      社会生活における言語使用に関する調査研究
    - 第三研究室
      音声および文字に関する実験的研究
  - 言語変化研究部
    国語の地域的，時代的変化に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      方言に関する調査研究
    - 第二研究室
      近代語に関する調査研究
    - 文献調査室
      国語および国語問題に関する情報の収集・整理
  - 言語教育研究部
    国民に対する国語の教育に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      言語能力に関する調査研究
  - 言語計量研究部
    国語及び国民の言語生活に関する計量的調査研究
    - 第一研究室
      語彙に関する計量的調査研究
    - 第二研究室
      文字・表記に関する計量的調査研究
    - 第三研究室
      言語の電子計算機処理およびそのプログラムの開発に関する調査研究
  - 日本語教育センター
    外国人に対する日本語教育に関する基礎的実際的調査研究
    - 日本語教育研究室
      日本語教育に関する日本語の調査研究並びに外国人の母語別学習目的別等による教育内容および教育方法に関する調査研究
    - 日本語教育研修室
      日本語教育に従事し，又は，従事しようとする者に対する一般的，基礎的な研修および日本語教育に関する基本的教材教具の作成に関する調査研究並びに，これに基づく研修会等の開催および教材教具の作成，提供

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

言語体系研究部

(1) 現代語文法の記述的研究　　第一研究室

現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。本年度は，主として，昨年までに採集した使用例カードを分類するかたちで，動詞の語形による分類，陳述副詞の分析を行った。（12ページ参照）

(2) 現代語彙の概観的調査　　第二研究室

近代になってどのような語がふえたか，という調査を続継。事務用語についての昨年度の調査結果を集計し，工場用語のゆれについて調査した。また雑誌における和語・外来語表記の調査に着手した。（14ページ参照）

言語行動研究部

(3) 敬語の社会的研究　　第一研究室

契約社会，利益社会とよばれる社会の中で，敬語がどのように意識され，使われているかについての実態を把握することを目標にした，3年計画の調査研究の第2年次である。“敬語が稀薄である”とされる茨城県北部（日立市）の企業（株式會社日立製作所・日立海岸工場及び多賀工場）を対象に，アンケート調査，面接調査，事務室内実況録音調査を実施し，更に企業の背景となる地域社会（日立市）の住民を対象に面接調査をした。調査後，それぞれの結果の整理・集計作業を進めた。（16ページ参照）

(4) 現代語の表現の文体論的研究　　第一研究室

日本語の表現力を見きわめ，新しいレトリック理論を考えるこの研究の一環として『比喩表現の理論と分類』（報告57）を刊行し，さらに内容面の分析に進むため，大幅な用例追加作業に着手した。（21ページ参照）

(5) 所属集団の差異による言語行動の比較研究　　第二研究室

昭和47年度に岡崎市で，昭和49年度に東京・大阪で行った調査資料を整理した。あわせて，大阪市で談話場面における言語行動の事例調査を行い，言語行動分析のための枠組みの試案の作成を行っている。

（23ページ参照）

(6) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究　　第二研究室

本研究は，昭和48年度に4年計画でスタートした。本年度はその最終年次にあたる。本年度は，約三万二千枚の方言親族語彙カードを意味項目ごとに語形によって類別する作業を続けた。また，大分県東国東郡国東町で臨地調査をした。調査そのものは，本年度で終了した。次年度以降は，報告書の原稿執筆にあたる。（25ページ参照）

(7) 発音過程に関する研究　　第三研究室

前年度まで続けてきたX線映画フィルムによる現代日本語音声の調音時における声道のトレースおよび計測結果を整理し，19種類の発話セットについて，声道の時間的変化を示す図を作成し，その調音運動を分析した。（28ページ参照）

(8) 図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究　　第三研究室

ミニ・コンピュータによる文章提示装置を用いて，読みの過程を特徴づけている眼の跳躍運動についての実験を実施した。（29ページ参照）

言語変化研究部

(9) 「各地方言資料の収集および文字化」のための研究　　第一研究室

失われつつある方言を，現時点で録音・文字化し，国語研究の基本的資料としようとする。本年度は，3か年計画の第3年次として，全国19か所で録音・文字化を行った。（31ページ参照）

(10) 各地方言文法調査の準備的研究　　第一研究室

文法項目を中心とする全国方言調査を実施するための準備として，調査項目・調査方法を検討するために必要な方言文法に関する既刊文献の目録を作成した。また，この分野における地域差と個人差との関連などについて考察するための小調査を行った。（35ページ参照）

(11) 明治初期における漢語の研究　　第二研究室

明治初期の翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）との漢語について比較考察するため，対応語の調査を行っ

た。また，東京日日新聞の用語・用字調査は，前年度までに行った明治・大正・昭和の10年代までの分に続き，昭和20・30年代の分について語彙表を作成した。また，近代語研究資料の調査を行った。（36ページ参照）

言語教育研究部

(12) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究　第一研究室

幼児，児童における母国語の習得過程，および言語の習得と幼児，児童の人間的諸能力の発達との関係を明らかにするため，前年度に続き，＜大小，高低，前後＞などの関係をとりあげ，それらの関係を表す語の意味理解と認知発達に関する実験を行った。また，2歳児の言語および学習行動に関する録音および観察を継続した。（38ページ参照）

言語計量研究部

(13) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究　第一，二，三研究室

用語調査ならびに用語検索システムを作成し，新聞語彙調査データ・高校教科書調査データ・文学作品の索引作成用データなど，各種の入力データについて機械処理を進め，さまざまの検索結果を得て，言語情報処理の基礎的な研究を行ってきた。また，語彙・表記および語句の連接形態などの計量的分析を進めた。（42ページ参照）

(14) 漱石・鷗外の用語の研究　第一研究室

電子計算機や高速漢字プリンターによって，漱石・鷗外の作品の文脈付き索引（ＫＷＩＣ索引）を作成し，それを用いて漱石・鷗外の用語の研究を行うもので，本年度は『山椒大夫』『坊っちゃん』『草枕』の，第一回出力ＫＷＩＣによる修正作業をほぼ終了した。また，語彙表作成や，文法・語法・文体などの調査にも着手した。（47ページ参照）

(15) 現代語の表記についての調査研究　第二研究室

電子計算機による表記形の集計や分析が効率的に実施しうるように，従来の各種表記調査のデータを収集・整理して，表記形基本ファイル（磁気ディスク）を作成するとともに，表記のゆれの測定法や表記意識の調査法など研究方法の検討と開発を進めた。（49ページ参照）

(16) 高校教科書の用語用字調査　　第一，二，三研究室

国民が一般教養として，各分野の専門知識を身につける時に必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として，高等学校の社会科・理科の教科書を対象として調査・分析を行うものである。本年度は第3年次で，データのさん孔を終了し，修正検査用の文脈付き用例表を作成し，検査を進めた。（51ページ参照）

日本語教育センター

(17) 日本語の対照言語学的研究　　日本語教育研究室

外国人に対する日本語教育の基礎となる日本語の対照言語学的研究の方法論を確立し，それに基づく個別言語との具体的な対照研究を展開しようとするもので，「日独語の対照言語学的研究」，「日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究」「日朝語の対照言語学的研究」の三つを具体的な課題とする。（55ページ参照）

(18) 日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究　日本語教育研究室

本研究は外国人学習者が学習すべき一般的，基本的な日本語の語彙の目安を立てることを目的とし，日本語教育ならびに国語学，言語学の専門家22人に委嘱し，『分類語彙表』（資料集6）に収録された約4万語の一語一語について基本度の判定を行い，その結果を集計することによって基本語彙表を作成しようとするものである。本年度は昨年度に引き続き，4万語のうち，後半の2万語についての判定を終了し，電子計算機処理のためのコード化作業を大部分終了した。（57ページ参照）

(19) 日本語教育の内容と方法についての調査研究　　日本語教育研究室

教育目的別による日本語教育の内容・方法上の問題点を明確にし，そこから日本語教育研究上の方法論と具体策を探求しようとするもので，本年度も年少者教育を対象とし，それぞれの機関の日本語教育実務に携わっている担当者の代表を集めた研究連絡協議会を設け，各機関の日本語教育の現状ならびに問題点を聴取した。（59ページ参照）

(20) 日本語教育教材及び教授資料の作成　　日本語教育研修室

1) 日本語教育参考資料の作成

日本語教育に関する参考資料として『日本語教育の概観』を作成した。これまで日本語教育を全般的に知るための日本語教育の沿革・現状等について総合的にまとめたものがなく，日本語教育への手がかりを得ることはむずかしかった。研究所に施設が完成し，日本語教育センターが発足したのを機会になるべく簡明に把握することができるようにまとめたのが本書である。(61ページ参照)

2) 日本語教育映画の制作

日本語教育のためのモデル教材として，日本語教育映画基礎編のうちの3巻（各巻とも5分もの）を制作した。内容としては，「いる・ある」，「移動の表現」，「受身の表現」をそれぞれとりあげた。制作にあたっては，所外に委嘱した6名の委員からなる日本語教育映画等企画協議会の協力を得た。(62ページ参照)

(21) 日本語教育研修の実施　　日本語教育研修室

日本語教員の資質向上をめざして，効果的な研修を行うためには，教授に必要な内容，カリキュラムの作成，教授資料，教材等の整備充実，また受講者の能力別，専門別，あるいは，長期・短期などのコース別研修のあり方など綿密な分析・検討のもとに実施する必要がある。そのために，現在日本語教育機関その他において実施している各種の日本語教育講座・研修会等についてその資料の収集および調査を実施中である。なお，今年度は，東京・大阪の2会場において，それぞれ現職者研修・初心者研修の2講座を夏期集中講座として開催した。また日本語及び日本語教育についての基礎的知識を一般に広めるために公開講座を開催した。

(64ページ参照)

(22) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理　　文献調査室

例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し，情報の収集整理を行った。(69ページ参照)

なお，上記の研究のほかに，文部省科学研究費補助金の交付を受けて，以下の研究を行った。

総合研究（B）表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究（代表　飯豊毅一）……表現法の全国調査を実施するための準備的研究として，全国各地の方言研究者を分担者・協力者とし，調査方法上の諸問題について検討した。あらかじめ各地で実験的小調査を行い，また，検討すべき問題点についてのレポートを求めた上で，全体会議を開催した。

（78ページ参照）

一般研究（A）幼児・低学年児童の語彙調査（代表　芦沢節）……戦後の社会生活および文化的生活様式の変化により，幼児や低学年児童の習得する語彙量や語彙内容は大きく変容していると思われるので，その実態や特色をできるだけ客観的にさぐろうとして，とりあげた調査である。本年度は3年計画の第1年次にあたり，準備調査であるので，24時間調査，誕生月追跡調査，語彙理解調査，語彙連想調査，言語生活アンケート調査などについて，小規模の各種テストを実施し，それらの調査方法を検討した。

（80ページ参照）

一般研究（A）現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究（代表　斎賀秀夫）……この研究は，二年計画として立案され，本年度はその第一年次に当たるが，ほぼ当初の計画通りに進行した。まず，現代語の表記における，個々の漢字の重要度を，国立国語研究所の各種語彙調査データに基づいて測るとともに，漢字の使い分けや送り仮名の個人差等の生ずる要因を，集団調査・面接調査によって明らかにしようとした。あわせて，従来の漢字調査・送り仮名調査等によって得られた漢字についての数量的な諸情報をコンピュータに入力し，シミュレーション等の実験によって，現代表記の成立条件を分析中である。（83ページ参照）

昭和51年度刊行報告書の概要

比喩表現の理論と分類（報告57）

日本語の表現力を確認し，現代文章における新しいレトリック理論を構築することを目ざす一連の研究のうち，比喩表現の部分をまとめたものである。担当は中村明。全体の構成は，第1部が理論的考察，第2部が分類で，その前後に序章と終章を配し，末尾に文献リストを添えた形になっている。

まず，序章で，比喩研究において残っている重要な課題を指摘した。第1部「比喩論」の第1編「比喩に関する基礎的考察」は，比喩表現のあらゆる分析の土台となる基本的な問題をとりあげたものである。その第1章「比喩の基本的性格」は，比喩という表現手段をとる目的，方法や機構の上での特色，コミュニケーション上の条件などについて論じたもの，第2章「比喩法の種類」は，修辞学における各種の比喩法を概説し，問題点を指摘したもの，第3章「比喩性の段階」は，比喩的である度合と中間性の問題を論じたものである。第2編「比喩研究の諸問題」は，いわゆる実用的文章と芸術的文章とにおける実際の比喩表現例をとりあげたもので，第4章「比喩的転換の諸相」は関係の移行のいろいろなあり方を扱ったものであり，第5章「比喩効果の分析」はイメジャリーの観点から文学作品を扱った分析例である。第3編「比喩における思考と表現」は，比喩を表す言語形式とそこに実現する比喩的対比事実との関係を考察したもので，第6章「言語形式と比喩的対比」はその基本的考察，第7章「比喩の成立と言語的条件」はより一般的な考察にあたる。第2部「比喩表現の分類」は，比喩表現の言語的な観点からの分類を実際の言語作品を資料として実施したもので，受け手側からの分類試案を提出し，それに基づく指標比喩・結合比喩・文脈比喩の分類結果を整理して掲げている。そして，終章は，本書の各部分の論及領域を明記して互いの関連を示したのち，この研究の位置づけを試みたところで閉じられる。

幼児の文法能力（報告58）

国語教育研究室（現言語教育研究部第一研究室）は昭和42年からか3年計画で特別研究「就学前児童の言語能力に関する全国調査」をとりあげ，文字力，語彙力，文法能力などを就学前の幼児がどのように獲得していくかを，全国的な視野でとらえようとし，各能力についての調査を実施したが，本書は，そのなかの文法能力に関する調査の結果を，当時，主として調査にあたった室員天野清（現九州大学教育学部助教授）がまとめたものである。

この調査は，幼児の文法能力を，幼児の構文作成能力，動詞を使い分ける能力，能動文・受動文などを作ったり変換したりする力とその理解力等の習得，発達状況において見ようとしたもので，東京・京都・和歌山の幼稚園4～6歳児（延べ37園・550名）を対象として実施した（一人ずつ個別テストの形式を用いる）。文作成をうながす文モデル図版を利用して幼児の文法能力を実験的に調べるという調査方法をとった点，テストに入るまでの練習過程を考察した点などに，調査方法上の大きな特色がある。

序章　本研究の立場と方法　第1章　幼児の構文の習得と動詞の分化　第2章　幼児の文の作成と文の変換機能の発達　第3章　幼児の文の変換機能の形式と精神発達　第4章　結語――明らかにされた諸事実と今後の諸問題。巻末に付録資料として，この調査で用いた，動詞分化テスト，文の作成・変換テストの手引き・文モデル図版・記録票等が添えてある。

調査データに基づいて，くわしい分析がしてあるので，日本語の基本的な構文のうち，どういう構文が，この期の幼児にとって困難か，意味の類似している動詞を，どの程度正しく使い分けることができるかなどを具体的に知ることができる。また，相手の立場に立って文を作成することがむずかしいが，それは従来の研究（ピアジェ学派）と比較すると，どう理論的に分析できるかなどについても述べてある。全体として幼児の文法能力の発達がこの期の精神発達と深い関係にあることが改めて認められる。

なお，このテストに用いた文モデル図版は，4歳以上の幼児の話しことば能力（文法能力）の特徴，欠陥などを簡単に調べるために利用できる。

電子計算機による国語研究Ⅷ（報告59）

・靄岡昭夫「言語研究のための索引作成システム」（1～17ページ）

電子計算機によって文脈つき用語索引を作成するための新しいシステムについて，その基本思想，単位切り規則，付加情報などについて述べた。

・中野　洋「索引作成のためのプログラムライブラリ」（18～62ページ）

文脈つき用語索引，語彙表を作成するための汎用プログラム集の報告である。どのような入力データでも受けつけ，どのような形にでも出力する機能をもっている。また，データメインテナンス機能も備えている。

・斎藤秀紀「言語処理におけるターンアラウンド・システム」（63～112ページ）

漢字プリンタ・光学マークリーダー・漢字ディスプレイなどを使用した言語処理用のマンマシン・システムについての報告である。

・石綿敏雄(注)「変形とその逆探知を含む構文解析」（113～139ページ）

どんな文法理論にも利用でき，どんな言語でも分析することのできる，新しい自然言語解析システムの報告である。また，実験によって得られた，情報科学および言語学的な問題点についても論究している。

・土屋信一「現代新聞の片仮名表記」（140～159ページ）

昭和41年の新聞三紙について，語彙調査データ（延べ197万長単位）を用いて外来語以外の片仮名表記を調査・分析した結果の報告である。

・田中章夫「漢字調査における統計的尺度の問題」（160～191ページ）

漢字調査における統計的尺度として，ある漢字がどれだけの範囲の語を表記しうるかを示す尺度（カバー率）を提案し，雑誌九十種の漢字調査データについて分析し，その有効性を検討したものである。

・佐竹秀雄「表記のゆれを測る」（192～202ページ）

表記のゆれについて考察し，ゆれの大きさを測る尺度を提案した。また新聞語彙調査データの一部について分析し，その有効性を検討したものである。

（注）石綿敏雄は51年4月に転出し，現在茨城大学教授である。

現代語文法の記述的研究

A　目的と内容

現代日本語文法の体系的な記述を目的とし，実際に使用された言語作品を資料として，それをカード化して分析するものである。本年度は，次の四つの仕事を行った。

a)　動詞の使用例の第一次分類

b)　陳述副詞の用法分析

c)　コソアドの分析

d)　文法に関する研究文献カードの作成

B　担　当　者

言語体系研究部第一研究室

室長　高橋太郎　a，c　　研究員　工藤　浩　b，d

研究補助員　鈴木美都代　a，b，c，d

aは高橋が，bは工藤が分析を担当し，それぞれ鈴木がこれを助けた。cは高橋と鈴木が，dは工藤と鈴木がそれぞれ共同で担当した。

C　本年度の作業

(1)　aでは，昨年度文学作品，科学説明文，論説文，シナリオの資料カードからぬきだした動詞の使用例カード（約20万枚）を語形によっておおざっぱに分類した。この分類の方法は，『幼児語の形態論的な分析—動詞・形容詞・述語名詞—』（報告55）の動詞の部と同じである（同書参照）。これらのカードは，カードボックスに収められているので，ボックスが語形変化表のようになっている。

(2)　bについては，昨年度までに採集した副詞および副詞相当語句の使用例

カード（約3万枚）を，まず語形別に分類し，さらに意味，機能の面から，属性副詞（情態と程度），時の副詞，陳述副詞の三つに大別した。このうち，本年度は陳述副詞の用法分類を行った。

ここでいう陳述副詞とは，次の三種をふくむものと，現在のところ考えている。①ムードの副詞―「けっして」「たぶん」「もし」など述語のムード（法）と関係するもの，②注釈の副詞―「あいにく」「やっぱり」「さすがに」など文の叙述内容に対する話し手の気持ちをあらかじめ示すもの，③とりたての副詞―「とくに」「むしろ」「すくなくとも」など，文中の特定の部分のとりたてかたを示すもの。

(3) cでは，シナリオにあらわれたコソアドの使用例のカードを集め，コ・ソ・アを総合的に比較するだけでなく，コレ・ソレ・アレ・ココ・ソコ・アソコなどセットをくむ単語群ごとにも比較し，また，それの指すものがヒトであるかモノであるか場所であるかのようなカテゴリカルなちがいにも着目した。その結果，コ・ソ・アの対立は，その指すもののカテゴリカルな性格などによって，細部のありかたが異なることがわかった。

(4) dとしては，1974～1976の3年間の論文集，講座ものなどに採録されている文献のカードを作成した。

D　今後の予定

aについては，今後カテゴリーごとに分析を行うが，来年度は，ボイスの分析からはじめる予定。

bでは，本年度に引き続き，①ムード，②注釈，③とりたての三つの陳述副詞に属する個々の副詞の用法記述を進める。また，文学作品の資料カードから用例の補充採集も行う予定。

cについては，本年度は，コソアドの直接的な用法しかみなかったので，今後文脈的な用法についても分析する予定。

現代語彙の概観的調査

A　目的と内容

現代日本語の語彙体系を，いろいろな観点から調査記述することを目的とする。本年度は，前年度に引き続きつぎの三つの仕事を行った。

a）現代語彙成立過程の調査

b）専門語の調査

c）雑誌九十種の語表記の調査

B　担　当　者

言語体系研究部第二研究室

室長　宮島達夫　　研究員　高木翠

C　本年度の作業

(1)　aでは，阪本一郎『教育基本語彙』のうち，『日本国語大辞典』に明治以前の用例がのっていないもの，したがって明治以後の新語である可能性のあるものを，ぬきだす作業をした。これは，約24900語中の約8100語，すなわち，ほぼ三分の一にのぼる。(『教育基本語彙』の語彙量を，前年度の年報で22500語とかいたが，調査の結果，誤りであることがわかったので，上のとおり訂正する。）次に，この8100語について，『日本国語大辞典』に出ている初出文献を記入することをはじめ，ハ行まで進んだ。

(2)　bでは，機械用語について調査した。「フライス盤～ミーリング」のような同義語のどちらを使うか，ということと，これらの用語が（特に事務系の人に）どのくらい理解できるか，ということである。調査対象は，「敬語の社会的研究」で調査の対象となった，日立製作所日立工場の285名，同多賀工場の168名である。なお，前年度の事務用語の調査結果から，事務用語

については，部門間の差よりも企業間の差が大きいらしいことがわかった。たとえば，「現金」と「キャッシュ」の使用率をくらべると，日立製作所本社では，73：25，日鉄建材本社では，49：49で，両社のあいだでかなりちがうが，同じ会社のなかの総務部，経理部などの部門のあいだでは，これほどの差はみられない。

(3) cでは，さきに語彙調査の対象とした1956年の資料について和語，外来語表記のゆれを調べ，ほぼ半分の集計を終えた。

D 今後の予定

aでは，上記8100語の『日本国語大辞典』における初出年代を調べ，どの年代にどのような語彙があらわれたか，大体の見当をつける。bでは，本年度の結果を分析するとともに，専門文献から専門語をひろうことを試みる。cでは，和語・外来語について調査を続ける。

敬語の社会的研究

A 目　　的

敬語がどのように意識され，使用されているかについて，これまでほとんど扱われてこなかったいわゆる契約社会・利益社会（当面，一般私企業）を対象にして実態調査を行う。この際に，社会言語学的な観点として，次の二点に特に注目する。

1．敬語意識，敬語使用に関わる要因として，これまで地域社会では，性，年齢，社会的階層，職業，学歴などが重要であることが明らかになってきているが，契約・利益社会では，何がどのように関与しているか。

2．契約・利益社会と，その成立基盤・背景としての地域社会との間の言語上の関連はどのようなものか。後者は，どのように，またどの程度，前者のいわゆる言語的後背地であるのか。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長　渡辺友左　　室長　中村　明　　研究員　杉戸清樹　　研究補助員　塚田実知代（旧姓林）　　堀江よし子（51.5.1　言語行動研究部第二研究室へ配置換え）

なお，事務室内実況録音調査実施には，言語行動研究部第三研究室の高田正治が，市民面接調査実施には言語体系研究部第二研究室の宮島達夫，言語変化研究部第一研究室の真田信治，言語行動研究部第二研究室の江川清，米田正人が，また企業内面接調査実施には宮島，江川が，それぞれ参加・協力した。調査実施時にはほかに東京外国語大学大学院院生当作靖彦，同学部学生安井清孝，清水秀雄の協力を得た。

以上の各調査実施にあたっては，株式会社日立製作所日立工場及び多賀工

場のお世話になった。企業内調査においてこのような協力が得られたことはまことに幸いであった。

C　本年度の作業

I　「A　目的」で示した観点1について，50年度は東京都にある二企業の本社管理事務部門の社員を対象に調査した（「年報27」参照）。本年度は株式会社日立製作所の下記二工場を対象にして，本社～工場という職場の性格の差異を考慮に入れた調査を実施した。具体的には，

a．日立製作所・日立海岸工場（重電機関係）：茨城県日立市

b．日立製作所・多賀工場（家庭電器関係）　：茨城県日立市

の，事務部門と現業部門の社員を対象に，以下の三種類の調査を行った。

1．アンケート調査

a工場：事務部門150名に依頼，138名が回答（92%）。
　　現業部門150名に依頼，147名が回答（98%）。

b工場：事務部門100名に依頼，83名が回答（83%）。
　　現業部門100名に依頼，85名が回答（85%）。

計500名に依頼し，453名（90.6%）の回答を得た。アンケート内容は以下の通りである。

イ．回答者の諸属性：性別，生年，出身地などのほか，所属部課，職階，所属歴なども含めた。

ロ．敬語習得　：いつごろ敬語を身につけたと思うか／育った家庭の言語的環境。

ハ．敬語意識　：ことば使いへの留意度／ことばのどんな面に留意するか／職場敬語の現状への意識／職場敬語の将来への意識／どんな要因を意識するか（職階・年齢・在社歴など）

ニ．敬語使用　：どんな言語形式を敬語と考えるか／「お」の使い方／「ワカッタ。スグ行ク。」の表現／

「掲示が出テイルガ見タカ。」の表現／朝のあいさつ（随伴動作も含む）／呼びかけの表現

ホ．書き言葉での敬語使用：電話連絡のメモを具体的に作ってもらい，あて名，署名，日付，一人称，二人称，三人称の待遇表現など十数項目に注目する。

ヘ．茨城県方言の職場内での使用：職場内で茨城県方言（文末「～ッペ」，接続「～ケンド」など）を使うか，使わないか，どう使うか。

ト．職場意識：ゲゼルシャフトと規定される企業がどこまでそうなのか，ゲマインシャフト性は存在するか，などを求めて社会学の観点から。

2．面接調査

事務部門のアンケート回答者から，直属・直轄の上司・部下の階層構成に留意しつつ抽出した100名（a，b両工場で各50名）に，以下の内容について個別面接した。

イ．どの職階の人とどのぐらい話すか（公的・私的な会話量）。

ロ．呼びかけ（「課長」，「佐藤サン」，「田中クン」など）。

ハ．謙譲表現（「オ持チイタシマショウカ」）。

ニ．「行ク」の一人称・二人称表現。*

ホ．「来ル」の一人称・二人称表現。*

ヘ．「居ル」の一人称・二人称・三人称表現。*

ト．「～テ居ル」の二人称表現。*

＊ニ，ホ，ヘ，トでは，各職階の人に対するそれぞれの場合について質問した。

3．事務室内実況録音調査

勤務中のより自然な会話を録音し，アンケート，面接調査の結果と比較しうる，ひとつの話し言葉資料を作成することが目標である。

a工場にある教育訓練校の事務室（室員23名。但し常時在室は5～6名。）を対象に，ごく普通の勤務日二日間の始業時から終業時までの間に，室内で交わされる自然会話，および同室備付けの電話による会話をすべて録音することを目指した。

あわせて，後日の文字化作業の補助資料として，また会話に随伴する行動の記述資料として，行動観察記録（誰が，誰に，どの位置で，坐って～立って，など）も採ることができた。

II．観点2については，対象とする企業を選定する際に，その企業が成立する地域社会の方言の敬語体系の特徴に注目し，敬語が稀薄（いわゆる無敬語地域）であるとされる北関東から茨城県日立市の企業を選んだ。この地域社会について，以下の要領で個別面接調査を実施した。

1．調査目標

イ．主たる調査である企業内調査で考慮に入れた，対象地域の方言敬語の実態をとらえる。

ロ．地域社会において，他からの移入者が当地の方言とどのような言語的接触をしているかをとらえ，企業内調査の参考に資する。

2．対象・規模

イ．はえぬきの一般市民・高年齢層・20名。

ロ．出身地に注目して選んだ移入市民・中年有職層・53名。

3．質問内容

イ．方言（含敬語）の使用　：音韻（子音有声化／無声化／連母音）
文末表現（依頼／使役／疑問／確認など）
接続表現（逆接／順接／条件など）
助詞（方向格／所属格など）

ロ．方言意識　：Ⅰのアンケート調査の項目と共通したもの。
敬語をめぐる障害・摩擦の経験の有無・内容。
当地方言は“敬語が少ない”という意見への肯否。その他。

Ⅲ. 調査結果の整理

Ⅰ，Ⅱの各調査実施後，調査結果の整理，集計の基礎作業に順次着手した。

アンケートへの回答はすべて数字コードに置換し，電子計算機データカードに入力し，その検査を終了した。

面接調査の結果は，対象個人ごとにその回答がまとめて見られる形の反応一覧表を作成し，更に対象の職階別の反応整理表にまとめつつある。

市民調査の結果は，設問ごとに回答を整理した。

事務室内実況録音については，テープを，実際に会話が収録されている個所を連続させる形で編集し，文字化作業に備えた。

D　今後の予定

52年度も，本年度までと同様の観点・内容で，一般企業を主たる対象にした調査研究を継続していく。職場の性格の点では，管理事務部門（50年度），現業部門（51年度）に続いて，営業・販売部門に焦点をあわせ，また地域の点からは，東京語の敬語体系が行われる地域（50年度），敬語が稀薄とされる地域（51年度）に続いて，いま一つの大きな勢力をもった関西方言の敬語体系が行われる地域（大阪府・京都府を予定）を選ぶ。

調査実施後，これまで継続・蓄積してきた調査結果の中間集計・基礎整理作業を更に進め，職場の差異・地域の差異などを考慮に入れた各年度の調査結果を，対比的かつ総合的に整理・集計し，分析作業に進む予定である。

現代語の表現の文体論的研究

A　目的・方法

この研究テーマは，広く日本語の表現力を確認し，記述するところに最終目標をおいている。研究全体の構想を略述すると，次のようになる。

1）現代における文章観・文章批評の実態を調べるため，既刊の文献から関連情報を収集し，整理する。

2）現実の言語作品から各種の表現手段を探索して1）を補充する。

3）両者を総合し，各技法の言語的性格と表現効果との対応を軸として整理することにより，現代レトリックを広く体系的にとらえる。

以上のうち，現代レトリックの全貌を大きくとらえること，および，その中の比喩表現の部分をくわしく扱うことの二点が，この研究の当面の目標である。前者は，7年計画の全期間を通して研究を進め，最終年次に報告原稿を執筆する予定である。後者もそれと並行するが，このほうは第5年次までにまとめたい。

B　担　当　者

言語行動研究部　第一研究室

室長　中村　明　　研究補助員　塚田（旧姓　林）実知代

C　本年度の経過

1）その各論の一つにあたる『比喩表現の理論と分類』（報告57）を刊行した。（9ページ参照）これは，比喩表現に関する理論的考察と，形態面を中心とした分類の試み，その分類結果を収めたものである。

2）比喩表現の内容的分析に基づく分類作業に入るためには大量の用例が必要なので，次のように用例補充作業に着手した。

① シナリオ作品をカード化した資料（26作品分）から代表的な指標をもつ用例を抽出する作業を完了した。

② 中央公論社版「日本の文学」から資料対象候補作品627編（小説・詩・短歌・俳句・戯曲・評論・日記など）を選定し，重要さを3段階に表示，分量等の諸情報を加えた一覧表を作成して，そのうちAランクの作品約20編について用例の採集・抽出を行った。

3）文章表現・修辞学・文体論関係の既刊文献を調査し，その一部を入手した。

D 今後の予定

1）① C2）②の用例補充を継続実施する。

② 既存用例とともに内容面の分析を行い，主として A．たとえる概念 B．たとえられる概念 C．共通性 の3観点を軸に，トピックを考慮しつつイメージを中心に分類する。

2）① C3）の資料の入手点数をふやし，関連分野の既知情報を収集・整理する。

② 各種の言語作品からその他の表現手段を探索する。

③ ①と②を総合し，各技法の言語的手つづきと表現効果との関連をとらえて，そこから新しいレトリック理論の構築を図る。

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目　　的

人びとの言語行動は，その人が置かれている社会的諸状況に依存する面が大きい。性・年齢などの自然的生得的な変数を始めとし，血縁的（たとえば，家族），地縁的（居住地），社会的（階層や職業）あるいは心理的（仲間意識・パーソナリティ）などの条件が絡み合って，人びとにあるタイプの言語行動をとらせていると考えられる。このことを中核として，種々の観点から社会言語学的な調査研究を行っている。

B 担 当 者

言語行動研究部第二研究室

主任研究官　江川　清　　研究員　米田正人（51.5.1 言語計量第三研究室から配置換え）　　研究補助員　堀江よし子（51.5.1 言語行動第一研究室から配置換え）

なお，日本語教育センター長の野元菊雄（aおよびb），言語行動研究部長の渡辺友左，同部第一研究室の杉戸清樹，日本語教育センター研究室の水谷修（室長）・高田誠，同研修室の日向茂男（以上，c）および非常勤所員の南不二男（東京外国大学教授，52.1.10～3.31）（b）がそれぞれ参加・協力した。このほか，大阪樟蔭女子大学の杉藤美代子教授（b），大阪外国語大学の吉田弥寿夫教授（c），大阪大学の徳川宗賢助教授（c）などの協力を得た。

C 本年度の研究

a）愛知県岡崎市での敬語使用および敬語意識の調査――昭和47年度に文部省科学研究費を受けて実施した試験研究(1)「社会変化と言語生活の変容」

（代表者　岩淵悦太郎）の調査結果につき，整理の遅れていた，敬語行動の段階づけの作業が本年度で完了し，全体の集計，分析に取り組む体制ができた。

b）東京都および大阪市での言語生活の実態調査――昭和49年度に文部省科学研究費を受けて実施した総合研究(A)「大都市における言語生活の実態調査」（代表者　野元菊雄）の結果につき，本年度は，アクセント・音韻などの整理を行うとともに，データ処理のための集計プログラムを作成した。

c）言語行動様式の分析のための準備的研究――言語的言語行動と非言語的言語行動とを総合的に把握するための方法論を確立するために準備的調査を大阪市で行った。数グループの談話場面を構成し，それをビデオ装置や録音器で録画・録音した資料をもとに，分析枠組みの試案を作成・検討している。また，談話場面出席者の中から数名を選び，面接法によって言語意識調査を行った。なお，この研究はサンプリングによるa），b）の調査研究とは対照的に事例研究として実施している。

D　今後の予定

a）52年度中に報告書の原稿執筆を終了させ，53年度に刊行する予定である。

b）54年度に報告書を刊行する予定で作業をすすめる。

c）52年度から，「言語行動様式の分析のための基礎的研究」として，このテーマを独立させ，引き続き，資料を得るとともに分析法を充実させていく。

各地方言親族語彙の言語社会学的研究

A　目的・意義

次の目的のもとに，わが国各地方言の親族語彙の収集と記述的研究を進める。

(1)　日本語の親族語彙に関する全国方言辞典または資料集を編集して刊行する。

(2)　日本語の方言の親族語彙は，語彙としてどのような構造をもっているか。親族組織上の特定の項目(・意味)を表す単語にどのようなものがあり，それらは全国的にどのような分布を示しているか。個々の親族語は，単語としてどのような意味や用法の構造をもっているか，などの言語的事実を明らかにする。さらに，これらの言語的事実が親族組織を含む日本の伝統的な社会構造や文化の構造とどのようにかかわり合う側面があるのかを明らかにする。

B　担　当　者

言語行動研究部第二研究室

言語行動研究部長　渡辺友左

C　本年度およびこれまでの経過

この研究は，旧第二資料研究室の研究課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」（昭和40～47年度）で渡辺が分担した部分の一部を発展させたものである。48年度から4年計画でスタートした。本年度はその最終年次にあたる。そこで，本年度に実施したことと合わせて，前年度までに実施したことを報告しておこう。

本年度は，前年度に引き続いて，次の二つの調査研究を並行して実施し

た。

(1) 臨地調査――本年度は，次の1地点を調査した。

大分県東国東郡国東町

この研究のスタート当初の段階では，全国を東北・関東・甲信・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄の10ブロックに分け，各1～2地点，全体で15地点程度の臨地調査を最終年次の本年度までに実施するという計画だった。しかし，予算その他の関係で，最終的には結局9地点しか調査できなかった。本年度に調査できた上記の大分県国東町のほか，次の8地点である。

青森県東津軽郡蟹田町（49年度）

青森県北津軽郡板柳町（50年度）

千葉県長生郡一宮町（48年度）

島根県隠岐郡西ノ島町（48年度）

山口県阿武郡川上村（49年度）

香川県三豊郡高瀬町（49年度）

徳島県三好郡西祖谷山村（49年度）

高知県宿毛市（50年度）

ブロック別にいうと，東北(2)・関東(1)・中国(2)・四国(3)・九州(1)の9地点となる。残りの甲信・北陸・東海・近畿・沖縄の5ブロックについては1地点も調査できなかった。

(2) 文献調査――全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分をカードに逐一転写したものが，前年度までに約二万一千枚出来上がった。当研究所所蔵のいわゆる「東条カード」の中の方言の親族語彙のカードと合わせると，約三万二千枚になる。このカードを分類整理して，前年度までに意味項目ごとの都道府県別台帳を作成し終えている。本年度は意味項目ごとの語形別類別の作業に一部とりかかったが，担当者である渡辺が本年4月1日付で言語行動研究部長に転じたため完了には至らなかった。

D　今後の予定 ——研究成果のまとめについて——

どちらも以上に報告したように未完のままで最終年次を終えることとなった。文献調査は，今後も時間をみつけては，残された作業を継続していく。そして，臨地調査で得られた資料と合わせて，本研究の目的の一つである，日本語の親族語彙に関する全国方言辞典または資料集を編集刊行するところまでできるだけ早くもっていきたい。

また，本研究のもう一つの目的を達成するための言語社会学的な記述研究は来年度には，少なくとも一部は報告できる見通しである。

発音過程に関する研究

A　目　　的

現代日本語の音声の，音韻論上の個々の問題，表現的な個々の特徴などを調音的，音響的，機能的な側面から明らかにすることを目的とする。おもに標準語の音声を分析の対象とするが，今後は比較の必要から，方言や外国語の音声，または聴覚障害者，言語障害者の音声も取り扱いたい。

B　担　当　者

言語行動研究部第三研究室

研究員　高田正治

C　本年度の研究

主として，前年度から引き続いて，標準語の種々の音声を発音する際の調音器官の動きの分析を，X線映画フィルム像によって行った。前年度までに，声道映像のトレースおよび計測が完了していた19種類の発話セット（$v^{\neg}$：型の単独母音および$cv^{\neg}$：cv型の無意味音節列でc＝/p/，/b/，/m/，/k/，/g/，/ŋ/，/h/，/c/，/n/，/j/，/w/と，v＝/a/，/i/，/u/，/e/，/o/との組合せ）について，声道の時間的変化を示す図（57枚）を作成し，これらの調音時に声道がもっている特徴をしらべ報告書（52年度刊行予定）の原稿としてまとめた。

D　今後の予定

次年度は，今年度まで研究の対象からはずされていたc＝/t/，/d/，/s/，/z/，/r/のばあいについて，同様の計測および分析を進める予定である。

図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究

A 目　　的

図形および文字が，感覚伝送系での情報処理，および大脳における神経系の活動の結果として知覚される過程について視覚心理学的立場から実験研究を行う。これにあわせて，読書過程に関する実験研究を行う。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

室長　神部尚武　　非常勤職員　小原美恵子

C 本年度の経過

前年度に整えられた文章提示装置（ミニ・コンピュータとディスプレイ装置を組合わせたもの）を用いて，読みの過程を特徴づけている1秒にほぼ4回程度の眼の跳躍運動が，どのような役割をはたしているかを調べる実験を行った。この実験結果から，読みの過程で普通に観察できる眼の跳躍運動は継次的に得られる視覚情報を統合する役割を持ち，このために大脳における情報の抽出がその時々の網膜像の範囲よりも大きな単位で行われるのに寄与するのではないかと考えた。この実験結果の一部は，日本心理学会第40回総会（同発表論文集439—440頁，51.9）で神部が報告した。

D 今後の予定

さらに実験装置を改良し，文章提示の時間および空間的条件，眼球運動などを手がかりに，読みの過程に関する基礎的な実験的検討を進めていく予定である。さしあたって次年度は，担当者が外国出張（52.3.15から）のため，

実験は行わず，これまでに得られた結果の整理および関連分野・文献の調査にとどめる。

「各地方言資料の収集および文字化」のための研究

A 目　　的

急速に変化し失われつつある方言を，現時点で録音・文字化（標準語訳・脚注つき）し，定本として永久に保存し，国語研究の基本的資料とする。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

部長　飯豊毅一　　室長　佐藤亮一　　研究員　真田信治　沢木幹栄

研究補助員　白沢宏枝

昭和51年度の地方研究員は次の各氏に委嘱し，そのうち，18の府県（印*）の担当者に録音・文字化の委託を行った。

担当地域	氏　名	所属機関＜職＞
北海道	五十嵐三郎	札幌大学＜教授＞
青　森	松本　宙	弘前学院大学＜助教授＞
岩　手*	本堂　寛	岩手大学教育学部＜助教授＞
宮　城	加藤　正信	東北大学文学部＜助教授＞
秋　田	井上　章	秋田大学教育学部＜助教授＞
山　形*	矢作　春樹	寒河江市立陵南中学校＜教諭＞
福　島	三浦　芳夫	安積商業高等学校＜講師＞
茨　城	金沢　直人	茨城大学教育学部＜教授＞
栃　木	大橋　勝男	新潟大学教育学部＜助教授＞
群　馬*	上野　勇	県立高崎工業高等学校＜教諭＞
埼　玉	井上　史雄	北海道大学文学部＜助教授＞
千　葉*	加藤　信昭	千葉大学教育学部＜助教授＞
東　京	大島　一郎	東京都立大学人文学部＜助教授＞

神奈川	斎藤義七郎	
新　潟*	剣持隼一郎	長岡工業高等専門学校<講師>
富　山	川本栄一郎	金沢大学教育学部<助教授>
石　川	岩井　隆盛	金沢女子短期大学<教授>
福　井*	佐藤　　茂	福井大学教育学部<教授>
山　梨	清水　茂夫	山梨大学教育学部<教授>
長　野*	馬瀬　良雄	信州大学人文学部<教授>
岐　阜	谷開　石雄	県立岐阜北高等学校<教諭>
静　岡*	日野　資純	静岡大学人文学部<教授>
愛　知*	山口　幸洋	
三　重	廣濱　文雄	天理大学文学部<教授>
滋　賀	筧　　大城	県立虎姫高等学校<教諭>
京　都*	佐藤　虎男	大阪教育大学<助教授>
大　阪	山本　俊治	武庫川女子大学<教授>
兵　庫	和田　　實	神戸大学教養部<教授>
奈　良*	後藤　和彦	大妻女子大学<助教授>
和歌山	村内　英一	和歌山大学教育学部<教授>
鳥　取	今石　元久	鳥取大学教育学部<講師>
島　根*	広戸　　惇	京都家政短期大学<教授>
岡　山	虫明吉治郎	県立玉野高等学校<教頭>
広　島*	室山　敏昭	広島大学文学部<助教授>
山　口	岡野　信子	梅光女学院大学<助教授>
徳　島	遠藤　潤一	徳島大学教育学部<助教授>
香　川	近石　泰秋	県立図書館<館長>
愛　媛*	杉山　正世	
高　知*	土居　重俊	四国女子短大・四国女子大学<教授>
福　岡	奥村　三雄	九州大学文学部<助教授>
佐　賀	神部　宏泰	佐賀大学教育学部<教授>
長　崎*	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部<教授>
熊　本	迫野　虔徳	熊本大学法文学部<助教授>

大　分	種　　友明	大分大学教育学部<助教授>
宮　崎*	日高貢一郎	ＮＨＫ総合放送文化研究所<所員>
鹿児島	田尻　英三	鹿児島大学教育学部<助教授>
沖　縄*	加治工真市	東京都立大学人文学部<助手>

C　本年度の計画

この研究は３か年計画とし，本年度はその第３年次にあたる。

昨年度は，全国22名の地方研究員に対して，担当各府県から１地点を選定し，対等の関係にある老年層の話者どうしの会話を録音し，文字化することを求めた。本年度は収録地点を４地点減らし，冒頭に記した18名の地方研究員に対して，録音・文字化を委託した。内容は，原則として昨年度と同一の地点で，（ａ）身分的に上下関係にある老年層の男性２人による対話，（ｂ）老年層の男性と若年層の男性との対話，もしくは両者を含む３人の話者の会話，（ｃ）場面設定の会話，の３項目についての録音・文字化（標準語訳・脚注つき）を行い，収録可能な地域では，民話の収録・文字化も実施することとした。（ｃ）については，「品物を借りる」「（旅行などに）誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を全地点共通の場面として設定した。

研究室でも，昭和51年６月，昨年度と同じ鳥取県八頭郡郡家町において上記の内容についての録音を行い，その文字化をすすめた。この録音・文字化には，担当者全員が参加した。

また，昭和52年３月18日・19日の両日に，地方研究員を中心とし，そのほかこの方面の研究に関係の深い研究者を招いて研究反省会を行い，これまでの研究を反省し，今後の資料整備の方針などについて検討した。所外からの参加者は，井上章，井上史雄，川本栄一郎，佐藤茂，田尻英三，本堂寛，馬瀬良雄，山口幸洋（以上，地方研究員），鏡味明克，Ｗ．Ａ．グローターース，吉田則夫の各氏であった。

上記の会とは別に，昭和52年３月に加藤正信氏（地方研究員，東北大学助教授）を招いて，この研究の反省，今後の問題について意見を求めた。また，同時期に衣笠日出男氏（郡家町教育委員会次長）を招いて，郡家町で採録した方言録音資料を整備するための助言を得た。

D　今後の予定

この研究は本年度をもって一応打ち切りとする。ただし，本年度に収録できなかった青森・宮城・石川・鹿児島の４地点，さらに必要と考えられる地点については，別の機会に補充したい。

来年度以降には当所に集まっている方言文字化原稿を整備し，なるべく早い機会に公刊したいと考えている。

各地方言文法調査の準備的研究

A　目　　的

文法項目を中心とする全国方言調査を実施するための準備的研究を行う。

B　担　当　者

言語変化研究部第一研究室

部長　飯豊毅一　　室長　佐藤亮一　　研究員　真田信治　沢木幹栄

研究補助員　白沢宏枝

C　本年度の研究

調査項目・調査方法を検討するために必要な，方言文法に関する既刊文献の目録を作成した。また，この分野における地域差と個人差との関連などについて考察するために，方言境界を含む宮崎県宮崎郡清武町から同県都城市にかけての5地点で，1地点5人の老年層の話者を選び，状況可能と能力可能，動詞の活用形式，格助詞「の」と「が」の尊卑，接続助詞の用法，そのほか計70の項目についての調査を行った。調査は昭和52年2月に実施し，担当者全員が参加した。

D　今後の予定

この研究は本年度で打ち切り，来年度以降に実施予定の「音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」（仮題。準備調査2か年，本調査3か年の予定）に引き継ぐこととする。

来年度は，引き続き，地方研究員に委託し，全国数十地点で数百項目についての準備調査を実施する予定である。53年度には，調査項目を絞ってさらに準備調査を行い，本調査のための項目を決定したいと考えている。

明治初期における漢語の研究

A　目的・意義

明治初期は，現代語の源流となった時代であり，日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い，日本語は大きく変化した。中でも，語彙の変化がはげしく，それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで，明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し，さらに大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって，明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ，現代語成立の歴史的背景を明らかにする。

B　担　当　者

言語変化研究部第二研究室

室長　飛田良文　(1)～(3)　　研究員　梶原滉太郎　(3)～(4)　　研究補助員　中山典子　(1)～(4)

C　これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度まで近代語研究室）では，昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し，明治初期漢語辞書８種の用語索引を作成し，48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集９）を刊行した（『年報』21～26参照）。現在，明治初期の代表的翻訳小説『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の漢語について調査を行っている。

D　本年度の作業

(1)　『花柳春話』における漢語の研究

書き言葉における漢語の使用状態は，文体による相違が著しい。そこで，

同一作品の翻訳で，同一訳者による，文体の異なる作品『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）の漢語について比較考察することを目的とし，漢文直訳体の漢語が和文体の訳文でどのような語あるいは語句と対応するかを調査した。本年度は，昨年度の一字漢語に引き続き，二字漢語の対応例を調査し，用例採集を完了した。また，来年度はこれら対応例の分類と分析を行うため，対応語一覧表の形式について検討した。

(2) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き漢語に関する研究文献を収集し目録に補充した。

(3) 近代語研究資料の調査

昭和51年9月21～22日にわたって，弘前市立弘前図書館所蔵「稽古館旧蔵本（弘前藩学校・江戸弘道館旧蔵本）」の文体・表記・符号について調査を完了した。また，旧藩主所蔵本の「奥文庫」の一部も調査した。調査にあたっては，弘前学院大学助教授松本宙氏，弘前市立弘前図書館奉仕整理係長広野一郎氏のお世話になった。また，東奥義塾図書館所蔵の「稽古館旧蔵本」およびその内容について，東奥義塾嘱託・弘前市文化財審議委員戸沢武氏から説明を受けた。

(4) 東京日日新聞の用語・用字調査

前年度に引き続き，カードの点検および語彙表の作成を行い，昭和22年11月10，11日，昭和32年11月10日の3日分，および昭和42年11月10日の一部分の語彙表を作成した。来年度は昭和42年11月10日の残りの分の語彙表を作成する。作成した語彙表とカードをもとにして，語表記の実態（かな表記・漢字表記・漢字かな交り表記等）の調査を行う。

E 今後の予定

来年度は，本年度の作業を継続し，下記の作業を行う予定である。

(1) 『花柳春話』における漢語の研究

(2) 東京日日新聞の用語・用字調査

(3) 近代語資料の調査

幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究

A　目　　的

幼児・児童における母国語の習得過程，および言語の習得と幼児・児童の人間的能力の発達との関係を，科学的に明らかにすることは，言語の教育の上で，まず解明されなければならない基本的な課題である。従来も，これらの問題を志向して研究してきたが，昭和49年度より，改めてこの問題に着手，その基礎研究として，「幼児・児童の関係語の理解と習得過程の実験」，および「幼児の言語および学習行動の観察」を継続する。

B　担　当　者

言語教育研究部第一研究室

室長　村石昭三　2　　主任研究官　大久保　愛　1—(2)　　研究員　岩田純一　1—(1)　　川又瑠璃子　2　　非常勤職員　福沢周亮（東京教育大学助教授，52.1.13～52.3.31）1—(1)

なお，実験に際しては，別掲の協力学校・協力園の協力を得た。

C　本年度の作業

1.　幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査

(1)　幼児・児童の関係語の理解と習得過程の実験

a　児童の「大きい——小さい」概念の発達に関する実験

実験　I

被験者	2：03 ～ 3：08歳	18人
	3：09 ～ 4：08	15人
	4：09 ～ 5：08	18人

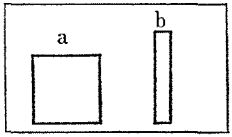
5：09 ～ 6：08　　16人

次のようなやり方で，実験を行った。

課題

I　図版，積木問題

（問題例）

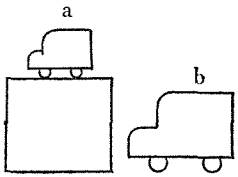


左図のような図形対や積木対を見せ，どちらが大きいかを指摘させる。計8問題

その際，面積，体積において，小さい刺激（b）は，大きい刺激（a）より高くなっている。

II　台問題

（問題例）

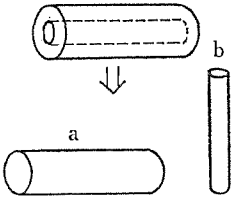


左図のように，子どもの見ているまえで，小さい方の刺激を台の上に乗せて，大小判断をさせる。計4問題

その際，台の上に乗せた小さい刺激（a）は大きい刺激（b）より高くなっている。

III　包含問題

（問題例）



左図のような刺激対の大――小関係を，含み含まれる関係で見せたあと，小さい刺激（b）を例のように位置変換する。そのあとで，どちらが大きいかを指摘させる。計4問題

課題施行順　I→II→III

実験　II

被験者　3：09 ～ 4：08歳　10人

4：09 ～ 5：08　　18人

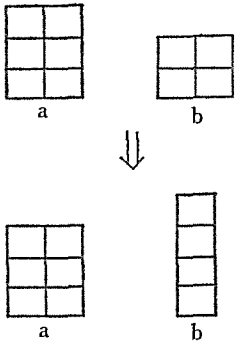
5：09 ～ 6：11　　19人

この実験の課題，手続きは，実験Iとほぼ同じだが，IIの台問題では，台の上への移動変換を子どもに見せなかった。これは，非観察の効果を見るために行われた。そして実験Iではなかったブロック問題が追加された。

課題

Ⅳ　ブロック問題

（問題例）



左上図のようなダイヤブロックの対を見せて，a，bのどちらが大きいかをたずねる。

そのあと，左下図のように，bのブロックを積み換えて，a，bのどちらが大きいかをたずねる。

計4問題

課題施行順　Ⅰ→Ⅱ′（非観察）→Ⅲ→Ⅳ

この他，実験Ⅰ，Ⅱで，「大きい――小さい」と「重い――軽い」，「高い――低い」のような性状語の概念間の相互連関性も調べた。

b　空間語と時間語の概念間の関係についての調査，実験

空間語と時間語はメタフォリカルな関係にあり，空間語の理解は，時間語の理解にとって，大きな役割を果たすと思われる。

空間語の（マエ，ウシロ）と，時間語の（マエ，アト）の概念内容に関する種々の予備実験を，3：09 ～ 6：11歳の子どもに行った。

協力校・協力園

協力校	東京　北区	豊島西小学校	（校長　中根　圭造）
協力園	東京　板橋区	帝京幼稚園	（園長　沖永　キン）
	東京　北区	としま幼稚園	（園長　滝沢豪一郎）
	東京　北区	豊島北保育園	（園長　是永　睦子）

c　研究の経過と問題点

“大きい――小さい”のような基本的な語の理解は，児童にとって簡単そうに見えるが，調査・実験の結果，案外，むずかしいことが見いだされた。児童の誤りは，垂直軸（高さ）によって大・小判断をすることから生じている。そして，この「大きい――小さい」という語の概念や意味素性の発達は，年齢とともに直線的に進むものではないことが明らかになった。これら

の結果から，児童の語の意味理解や概念発達に潜む複雑なプロセスを解明することが重要であると思われる。

(2) 幼児の言語および学習行動の観察

今年度の方法および結果

被験者：2歳児1名，昨年度と同一児（小泉健彦，昭和49年3月3日生）

方法：①毎月誕生日の同日前後および半月後の定期的追跡観察および録音。(昨年度に引き続いて，満3歳時までの1年間を調査者により，母親と被験者および調査者と被験者の会話を2時間録音。カセットテープ往復120分使用)。

②母親による随時録音（昨年度と同様母親に委託）

結果：①昨年度録音し，文字化の終了した調査者による採集分の1歳代（満2歳まで）については，カード化し，そのうち，語の意味の習得を見るため，出現語について，五十音順および，意味分類別に整理を行った。その一部，「色彩語」と「自分および身のまわりの人の呼び方」の習得については，年月日別に一覧できる表をつくった。

2. 報告書等の作成

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」に関する報告書は既刊の『幼児の読み書き能力』(報告45) に続いて，『幼児の文法能力』(報告58) を刊行した (10ページ参照)。

また幼児の語彙力調査の報告については，必要な資料の整理分析を進めた。一方，「現代児童・生徒の言語能力の動態調査」に関する報告のうち，「児童の文章表現力」について脱稿した。

D 今後の予定

昭和52年度は前年度に引き続き，「幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査」を継続しながら，昭和51年度より3年計画で着手された文部省の科学研究費（一般研究A）による，「幼児・低学年児童の語彙調査」の基礎的課題を研究していく予定である。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A　目的・意義

電子計算機を使って，日本語のデータを処理しようとすると，ことばや文字を扱わせる上で，解決すべきさまざまな問題が生じてくる。たとえば，日本語の活用現象の処理や，漢字の処理などは，その一例である。また，電子計算機の高速性と大量処理の能力を利用して，日本語の諸性格を研究すると，従来の研究方法では，とらえられなかった研究課題が浮かびあがってくる。文字連続や音素連続の研究，語句の相互連続の研究，あるいは，用語の自動検索に基づく語彙や文法，文体等の研究などは，その例であり，国語研究における電子計算機の利用価値は，今後，ますます，高まってくることが予想される。しかし，上記のような問題を解決したり，課題を研究したりするためには，多くの基礎的な調査と方法論の確立が，まず必要である。

この研究の当面の目的は，こうした問題を研究していくための，基礎的な研究資料を作成し，それに基づいて，日本語の電子計算機処理の基礎理論（アルゴリズム）を検討するところにある。したがって，その成果は，国語資料の機械処理に理論的根拠を与え，各種の言語情報処理の進展にも役立つものとなろう。

B　担　当　者

言語計量研究部第一研究室

室長　土屋信一　　研究員　中野　洋　鷲岡昭夫　　研究補助員　堀江久美子　長田厚子

言語計量研究部第二研究室

室長　田中章夫　　研究員　佐竹秀雄　　研究補助員　大滝弘美

言語計量研究部第三研究室

室長　野村雅昭（51.8.1　筑波大学文芸言語学系から転入）　主任研究官　斎藤秀紀　研究員　田中卓史（52.1.1　九州大学工学部から転入）　米田正人（51.5.1　言語行動研究部第二研究室に配置換え）　研究補助員　小高京子　沢村都喜江　科野千夏　米田純子（旧姓竹内）

C　これまでの研究経過

昭和41年度に電子計算機が導入されて以来，大量語彙調査の調査方式の検討と調査システムの開発のほか，「言語単位の自動分割」「言語データの機械処理法」「構文解析の自動化」「文字の連続確率（エントロピー）」「用語検索システムの開発」「言語情報処理のための言語分析」などの研究を行い，その成果は，『電子計算機による国語研究』（報告31）ならびに，『電子計算機による国語研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ』（報告34・39・46・49・51・54・59）に公表してきた。また，その途中経過や中間結果は，部内報告『ＬＤＰ』『季報』に随時発表している。

D　本年度の研究

本年度の調査研究は，以下のとおりである。

Ⅰ．調査システムの開発

①　語彙調査システム

高校教科書の用語調査システムは，データメインテナンスのプログラムが完成し，「高校教科書用語用字調査システム（中間報告２）」（中野・斎藤・科野・米田純子）を『季報1976秋』に発表した。また，オペレート支援プログラムを各種開発しており，その一部を「教科書データ（ＭＴ）の一部抜き出しプログラムについて」（科野）と題して『季報1976秋』に発表した。同語異語判別および集計のプログラムは開発中である。

また，新聞語彙調査のデータメインテナンスは引き続き行われ，語彙・文法研究用資料として整備されつつある。進行の程度は，「新聞語彙調査――ＫＳＩＮシステム――」（米田純子『季報1977春』）に報告してある。

② 用語検索システム

用語検索システムに関しては，コンコーダンスおよび語彙表を作成するための，汎用プログラム集が完成した。これは入力データが紙テープでもカードでもよい，漢字まじりでも仮名でも英字でもよい，付加情報が単位情報だけでも，読み仮名・語種・品詞・活用情報がついていてもよい，また出力は漢字プリンタでもラインプリンタにでも漢字テレタイプ印字機にでも出せる機能を持っている。その他にこのプログラムの特徴は，特に大量データの処理において大きなネックとなるエラーデータのデータメインテナンスについての各種のプログラムが用意してあることである。このプログラム集の使用法についても報告した。「国語研究のための索引作成システム——新システムの基本思想を中心として——」（靏岡）「索引作成のためのプログラムライブラリ」（中野）（以上二論文『電子計算機による国語研究Ⅷ』）「索引作成プログラムライブラリの使用法」（中野『季報1976夏』）「索引作成プログラムライブラリ——修正システムについて」（中野・長田『季報1977春』）がそれである。コンコーダンス作成のプログラムは各種開発されている。ＰＬ／１言語によって書かれた全体で26ステートメントという非常に短いプログラムが作られた。「ＰＬ／１によるＫＷＩＣプログラム」（斎藤『季報1976夏』）がそれである。

③ 新しい言語処理システムの開発

前年度開発された自然語処理システムＩＲＩＳ０Ａは，「変形とその逆探知を含む構文解析」（石綿敏雄，51.４.１より茨城大学教授に転出）と題し，『電子計算機による国語研究Ⅷ』（報告59）に発表された。高速漢字プリンタおよびＯＭＲ，漢字ディスプレイを使用した，ターン・アラウンド・システムが完成した。これは，これまでの多くの言語調査システムが，機械処理の前に人手によるデータの編集を行うプレ・エディット方式であったのに対し，機械処理の途中，または機械による編集の後で，人手による編集を行うポスト・エディット方式に変えたものである。こうすることにより，処理の精度をあげることができ，また，機械と人間との関係において柔軟な処理システムを

組むことができる。成果は，「言語処理におけるターンアラウンド・システム」（斎藤『電子計算機による国語研究Ⅷ』）に発表した。

最近，急速に普及しつつあるフロッピー・ディスク（ディスケット）は言語処理用デバイスとしても有効である。これについて，以下の検討が発表されている。「フロッピー・ディスクを使ったターンアラウンド・システム」（中野）「漢字テレタイプライタに対する2～3の提案」（斎藤）以上二論文は『季報1976冬』に発表した。

Ⅱ．語彙・文字・表記に関する研究

① 語彙調査に関するもの

語彙表や辞書・コンコーダンスにおける見出し語の配列について論じた「索引類における直音・拗音の配列順について」（土屋『季報1976冬』）を発表した。また，語彙の分析において問題になる形容動詞語幹の認定について考察を加えた，「形容動詞の研究（二），（三）」（靏岡『季報1976夏』『季報1977春』を発表した。また，教科書と小説の文体，特に体言と格助詞「の」の連鎖について述べた，「現代文体の実態調査（一）――小説と教科書――」（靏岡『季報1976冬』）を発表した。これは，国語学会秋季大会の研究発表会において発表し，国語学会員の意見を求めた。その要旨は，「体言と連体格助詞『の』の連鎖――現代文体の計量的研究試案――」と題して『国語学108集』（昭和52．3）に報告してある。

② 語彙の量的構造に関するもの

話題の展開が語彙の分布にどのような影響を与えるかを調べ，その度合を計る尺度を提案した，「文章の語彙構造に関する探索的研究(3)――話題の展開と語彙の分布――」，日本語の語彙量と分布を同じ内容を表したテキストによって，英・独・仏・西・葡の五か国語と比較し，語彙調査単位や同語異語の判別のあり方について考察した，「語彙の対照研究(1)――『星の王子さま』を資料として――」，話しことばと書きことばの語彙の比較を試みた，「話しことばの語彙――書きことばの語彙との比較――」（以上いずれも中野『季報1976夏・秋，1977春』）を発表し

た。

③　文字・表記の研究に関するもの

昭和41年の新聞三紙の片仮名表記についての分析が，「現代新聞の片仮名表記」（土屋『電子計算機による国語研究Ⅷ』）として発表された。また，漢字音訓のウェートを測る尺度として，データの中に現れた漢字の読み（音訓）が，それぞれ，どれだけの語に用いられているかを，語彙の総体に対する比率で示したもの（音訓カバー率）を提案した，「漢字の音訓カバー率」（田中章『季報1976夏』）が発表された。昭和52年1月21日に国語審議会で発表された「新漢字表試案」で，新たに加えられた83字，削除される33字について，雑誌九十種の調査と新聞の調査での使用度数を調べた，「新漢字表試案と国語研調査との比較」（土屋『季報1977春』）を発表した。

E　今後の予定

来年度は，継続研究の他，高校教科書の用語用字調査に伴う機械処理システム（特に同語異語の判別，および集計プログラム）の開発・試作，その他の実験的研究を行う。

漱石・鷗外の用語の研究

A　目的・意義

この研究は，「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」の一環として開発した索引作成システムを実際に使用して，夏目漱石と森鷗外の作品の用語索引を作成し，語彙・文法・表記その他いろいろな面から研究を行うものである。

B　担　当　者

言語計量研究部第一研究室

室長　土屋信一　　研究員　中野　洋　鷲岡昭夫　　研究補助員　堀江久美子　長田厚子

なお，同研究部第三研究室の全員が協力した。

C　これまでの研究経過

46年度までに開発されたKWICシステム（第一システム）を使用して，漱石の『三四郎』『硝子戸の中』『行人』，鷗外の『高瀬舟』『青年』のプレ・エディット（単位切り・清書・付加情報付け等の前処理）・漢テレさん孔・電子計算機への入力および索引作成処理を行い，索引ファイル（磁気テープ）を作成した。また，これらについては片仮名KWIC索引をラインプリンタにより出力した。

一方，数千字の文字パターンを内蔵した高速漢字プリンタが実用化されたので，これを用いる類別用語検索システム（第二システム）を完成させ，鷗外の『寒山拾得』『雁』の索引ファイルを完成させた。さらに外注によりこの二作品の漢字仮名交りKWIC索引を出力印字した。引き続き，漱石の『坊っちゃん』『草枕』『こころ』，鷗外の『山椒大夫』『渋江抽斎』もこの第二シ

ステムによる処理に着手した。

なお，49年度末から当研究所に高速漢字プリンタが導入され，外注によらないでも，各索引の漢字仮名交り KWIC を作成することができるようになった。

D　本年度の研究

本年度は，第二システムを用いて『坊っちゃん』『草枕』『山椒大夫』の索引化を進めた。主な内容は，昨年度までに出力された KWIC 索引の検査とそれによって発見されたエラーの修正であった。この結果，修正されたKWIC 索引ファイル（磁気テープ）が出力された。

なお，KWIC 索引を用いて，漱石の『坊っちゃん』，鷗外の『山椒大夫』における，体言と「の」の連鎖が，説明文（高校教科書）と比較して，少なく，また長さも短いということが明らかになった（国語学会秋季大会において鷹岡昭夫が発表した）。

E　今後の予定

この研究は消耗品費，人件費等を多く必要とするが，予算を得て，今までに作りかけている作品の索引を完成する予定である。また，用語研究については，KWIC 索引を利用して，本格的に開始する。

現代語の表記についての調査研究

A　目的・意義

現代語の表記についての，各種の調査データを収集・整理し，電子計算機による表記形集計が効率的に実施しうるように，表記形基本ファイルを作成する。あわせて，表記の計量的調査の調査法を検討し，国語表記の分析に適した研究方法を開発していくことを目的とする。

B　担　当　者

言語計量研究部第二研究室

室長　田中章夫　　研究員　佐竹秀雄　　研究補助員　大滝弘美

C　これまでの経過

新たに計画された研究であるが，研究資料としては，かつて当研究所が実施した，現代雑誌九十種についての表記調査および現代新聞についての表記調査等の調査資料を使用する。

D　本年度の作業

1）表記形集計用基本ファイル（磁気ディスク）の作成

表記形のバラエティの多いデータとして，現代雑誌九十種の表記調査のカードによって，入力用原稿の作成を進め，その一部については，パンチ作業を開始した。

2）新聞の表記調査の仮名書きデータの整備

昭和41年の朝日・毎日・読売の新聞三紙一年分を対象として実施してきた，新聞の表記調査の漢字データについては，前年度『現代新聞の漢字』（報告56）として調査結果を発表したが，仮名書きデータについては，一部未整理

のままになっているので，これを整理して表記台帳を作成する作業を進めた。作業の内容は，仮名表記語と漢字表記語の語長を，一定の基準でそろえてから，各々の語の仮名表記形と漢字表記形とをマッチングし，台帳に記入していくものであるが，本年度は，主として，語長をそろえる単位切り作業に力を注いだ。

3）表記調査法の検討と開発

表記の計量的調査の調査法の研究としては，本年度は，特に，表記のゆれの測定方法について考察し，「音訓カバー率」などの統計的尺度を設定して，その有効性を検討した。

E　今後の予定

上記のうち，表記形集計用基本ファイルの作成作業は，入力用原稿の作成が，ほぼ終了したので，来年度は，パンチ作業に主力を注ぐとともに，一部については，コンピュータ入力を開始する予定である。

新聞表記調査の仮名書きデータの整備は，単位切り作業が近く終了し，各語の，仮名表記形と漢字表記形のマッチング作業にはいることになるが，この仕事は，最終的には，前記の基本ファイルの作成に結びつくものである。すなわち，マッチング作業によって，各語の表記形が出そろった段階で，基本ファイルに補充し，ファイルの充実をはかっていくことができる。

表記調査法の研究としては，今後，漢字の重要度の測定法および表記意識の調査法等の問題をとりあげていく予定である。

高校教科書の用語用字調査

A　目　　的

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために，国立国語研究所では，これまでに，婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種，新聞三紙を対象として，調査を重ねてきた。この調査研究は，以上の諸調査のあとを受けて，国民が一般教養として各分野の専門知識を身につける時必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として，高等学校教科書について用語用字の実態を調査分析するものである。

B　担　当　者

言語計量研究部

部長　斎賀秀夫　　第一研究室，第二研究室，第三研究室の全員

C　これまでの経過

この調査は昭和49年度に発足した。49年度・50年度の作業は，次のとおりである。

(1)　調査対象の選定……高校の社会科，理科，数学の教科書10冊を対象として選定した。すなわち，政治経済，倫理社会，地理B，世界史，日本史，生物Ⅰ，化学Ⅰ，物理Ⅰ，地学Ⅰ，数学Ⅰである。範囲を社会科，理科，数学に限ったのは，説明文を調査対象としたためである。また，これまでの用語用字調査がサンプリング調査であったのに対して，この調査は，各分野の知識体系を記述する用語を分析するという観点も有することから，全数調査を主とし，調査対象の概略を知るために先行させた二十分の一の規模のサンプリング調査を従として行った。なお，調査対象とする教科書の選定と収集については，教科書協会の協力を得た。

(2) 調査項目の決定……用語用字調査の結果として作成する用語表・用字表の種類および形式，分析項目を検討し，決定した。

(3) 調査単位の決定……文節から助辞を切り出したもの（W単位）と，それよりも小さく，形態素に近いもの（M単位）との二種に決定した。

(4) 作業過程の決定……(a)台帳作成・管理，(b)文・段落等の情報の記入，(c)単位切り・その検査，(d)清書・その検査，(e)データさん孔，(f)原文の機械読みこみ，および電子計算機による機械的チェック，(g)出力・印字，(h)校正，(i)修正データ作成・さん孔，(j)再読みこみ処理，(k)ミニKWIC作成，(l)出力・印字，(m)校正，(n)修正データ作成・さん孔，(o)修正機械処理，(p)最終ファイル作成，(q)同語異語判別，(r)判別結果の機械処理，(s)比率計算，(t)語彙表作成，(u)文脈付き用例表作成，(v)文字集計など。

(5) 作業の実施……上記(4)の過程に従い，機械処理システムを設計し，1までのプログラミングを終了した。データの人手および機械による処理は，一部データ（全体の二十分の一の標本および政治経済）については，データ検査用のミニKWIC作成・印字を経て，(m)の校正の段階まで達した。他の教科書データは数学Ⅰ（bの段階までで作業を中断）を除いて，(d)または(e)の段階まで進んだ。

D　本年度の研究作業

1）機械処理プログラムの作成……機械処理を進めるためのプログラムは，(m)・(n)・(q)のデータ修正システムまで完成した。データ修正は，先に行った新聞語彙調査では，漢字テレタイプを使って全体をさん孔しなおす方式を採用したが，このたびは作業の能率をよくするため，修正する語の番号と内容と修正の方法（削除・挿入・差し換えの別）を紙テープにさん孔し，電子計算機で該当個所のみの修正処理を施す方式を採った。さらに，最終ファイル作成・同語異語判別のためのシステムの検討に着手した。

2）データの人手および機械による処理……前年度のあとを受けて作業を進

め，社会科・理科全体では，(e)データさん孔まで終了した。入力原稿は，推定400万字（読み仮名・単位等の情報および機械操作のためのコードも含む）にもおよび，この大量のデータのさん孔をできるだけ速かに完了させることが，この用語調査の前半の課題であった。当初の計画からすれば，全データのさん孔は大きく遅れたと言えるが，遅れをこの程度に食い止め得たのは，データさん孔作業を担当した社会福祉法人東京コロニー・トーコロ情報処理事業部の協力に負うところが多い。

データさん孔の済んだものから，順次，電子計算機に入力し，チェックプログラムによる検査を経て，修正用のミニKWICの作成に進んだ。二十分の一の標本の一部は，修正データをさん孔し，(o)の段階まで進んだが，これは，先に述べたデータ修正システムのテストラン・データとするためである。

各教科別に本年度の作業を示せば，次のようになる。

a） 政治経済……ミニKWIC作成，検査，修正データ清書。

b） 生物I……機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

c） 物理I……機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

d） 化学I……データさん孔，機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

e） 地学I……データさん孔。

f） 地理B……データさん孔，機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

g） 日本史……清書，データさん孔，機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

h） 世界史……データさん孔，機械チェック。

i） 倫理社会……機械チェック，ミニKWIC作成，検査。

j） 全体1／20標本……検査，修正データ清書，一部修正データさん孔。

E　今後の予定

上記（C4）の予定に従い，作業を継続する。来年度は，データ修正の機械処理(o)が中心となろう。一部データについては，同語異語判別の機械処

理(I)まで進む予定である。

日本語の対照言語学的研究

A 目　　的

外国人に対する日本語教育において最も有効な理論的基軸となる，日本語の対照言語学的研究の確立を目ざすもので，基礎的一般的方法論の模索と，個別言語との対照等の具体的研究とを展開しようとするものである。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研究室（51.10.1 以降は日本語教育センター日本語教育研究室）

室長　水谷　修　　研究員　高田　誠（51.10.1主任研究官に昇任）　志部昭平

C 本年度の作業

基礎的一般理論研究においては，明確なかたちでの成果は残せなかったが，個別研究では次の三つの領域を設けて予備的研究を着実に進め，来年度以降の（数年にわたるかなり）大きなプロジェクトの発足の準備をした。

1）「日独語の対照言語学的研究（国際共同研究3年計画）」ドイツ語話者のための日本語教育に寄与するため，ドイツ連邦共和国マンハイム市にあるドイツ語研究所（Institut für deutsche Sprache）との共同研究として行う。

2）「日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究（特別研究4年計画）」日本人の言語行動様式の類型――言葉を中心とするコミュニケーションパターン――の体系づくりを目指す研究で，外国人の言語行動習慣との比較対照的見地からの検討も加え，日本人の言語行動様式の特性を明らかにしようとするものである。

3)「日朝語の対照言語学的研究」朝鮮語話者のための日本語教育に対して，対照言語学的な研究を進めるための基礎的研究。

D　今後の予定

「日独語の対照言語学的研究」では，来年度，文部省在外研究員制度により研究員一名をマンハイム市のドイツ語研究所に長期滞在させ，また別途に数名の研究員をも派遣して短期間の調査を実施することを計画している。

「日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究」では，テレビ・ラジオ番組からの資料採集と整理に重点をおき，「日朝語の対照言語学的研究」では，朝鮮語話者の日本語能力の実態の調査と日朝語文法形式の対応用例の収集を行う。

対照言語学の方法論模索のための基礎的研究も，上記の三つのプロジェクトの実施に併行して行っていく。

日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究

A　目　　的

外国人の日本語学習者が，専門領域の研究，または職業訓練にはいる基礎として習得すべき基本的な日本語の語彙について標準を立てることを目的とする。

B　担　当　者

日本語教育部日本語教育研究室（51.10.1 以降は日本語教育センター日本語教育研究室）

室長　水谷　修　　研究員　高田　誠（51.10.1主任研究官に昇任）　志部昭平，なお，日本語教育研修室の研究補助員　高野美智子の助けを得た。

C　本年度の作業

本年度は3年計画の第2年次にあたり，『分類語彙表』（資料集6）に収録された語についての専門家判定による調査の後半計画をほぼ終了した。収録語約4万のうちの前年度予定分2万語につづく約2万語についての判定を下記の方々に依頼し，回収を完了した。また同時に電子計算機使用に対応するためのコード化作業も全体計画量の大部分について終了した。

判定を委嘱した専門家は次のとおり。

日本語教育関係者11名。

浅野百合子（言語文化研究所附属東京日本語学校講師）

石綿敏雄（茨城大学教養部教授）

伊藤芳照（東京外国語大学外国語学部附属日本語学校教授）

今田滋子（国際基督教大学教養部助教授）

加藤彰彦（実践女子大学短期大学部教授）

川瀬生郎（東京外国語大学外国語学部附属日本語学校教授）

窪田富男（東京外国語大学外国語学部教授）

武部良明（早稲田大学語学教育研究所教授）

玉村文郎（同志社大学文学部助教授）

森　　清（言語文化研究所附属東京日本語学校専任講師）

森田良行（早稲田大学語学教育研究所教授）

研究所内の判定者11名。

林　　大（国立国語研究所長）

西尾寅弥（言語体系研究部長）

芦沢　節（言語教育研究部長）

斎賀秀夫（言語計量研究部長）

田中章夫（言語計量研究部第二研究室長）

野元菊雄（日本語教育センター長）

水谷　修（日本語教育センター日本語教育研究室長）

高田　誠（日本語教育センター日本語教育研究室）

志部昭平（日本語教育センター日本語教育研究室）

武田　祈（日本語教育センター日本語教育研修室長）

日向茂男（日本語教育センター日本語教育研修室）

D　今後の予定

本年度までに終了した約4万語の判定結果をもとに，電子計算機を利用して統計的処理を加え，6000語，2000語を目安とした一次語彙表を作成する。また最終的な日本語教育のための基本語彙表を得るため文法，意味用法，使用率その他学習目的，外国語との対照などの観点からの検討を加える。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

A　目　　的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について，教授法，教育内容，教材に関する問題点を収集整理し，日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を探求し，日本語教育の内容方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B　担　当　者

日本語教育部日本語教育研究室（51.10.1 以降は日本語教育センター日本語教育研究室）

室長　水谷　修　　研究員　高田　誠（51.10.1主任研究官に昇任）　志部昭平

C　本年度の作業

昨年度にひきつづき，「年少者に対する日本語教育機関——外国人学校等」からの委員と日本語教育センターのメンバーによる研究協議集会を開催した。協議内容は昨年度の課題であった問題分析から，問題解決のための共同研究体制づくりへと発展した。

外部から委員に委嘱した方々は次のとおりである。

松本多嘉子（聖心インターナショナル・スクール主任）

羅　長圜（東京中華学校校長）

斎藤修一（リセ・フランコ・ジャポネ主任）

フェルナン・ブアヴェール（国際聖マリア学院長）

北村房子（西町インターナショナル・スクール部長）

松丸啓子（東京ドイツ学園教員）

ヒュー・ブラウン（アメリカン・スクール・イン・ジャパン部長）

仙石宥子（クリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン教員）

高橋美智（玉川学園高等部教員）

金田真知子（サンモール学校教員）

法崎久子（名古屋国際学園教員）

細川廓真（横浜山手中華学校教員）

海野光子（カナディアン・アカデミー部長）

羽田満子（ステラマリス・インターナショナル・スクール教員）

陶山尚志（在日米軍教育局教員）

菊地　章（横田アメリカン・ハイスクール教員）

中村正巳（座間ハイスクール教員）

新田文輝（キニック・ミドルスクール教員）

竹下享子（キニック・ハイスクール教員）

富松民子（サリバンズ・エレメンタリースクール教員）

また，機関訪問を中心とする実態調査も実施し(鹿児島大学ほか)，資料，文献による情報の補いと確認とをした。

D　今後の予定

「年少者教育」に関する調査研究を更に継続するとともに，「帰国子女に対する日本語教育」にも調査対象を拡げていく計画である。

日本語教育教材および教授資料の作成

A　目　　的

日本語教育にたずさわる人を対象として，その教授上必要とされる教育教材開発のためのモデル教材の作成，またその基礎的知識を確立し，指導上の参考に資するための教授資料の刊行を目的とする。

B　担　当　者

日本語教育部日本語教育研修室（51.10. 1 以降は日本語教育センター日本語教育研修室）

部長　野元菊雄（51.10. 1 日本語教育センター長）　　室長　武田　祈

研究員　日向茂男　田中　望　　研究補助員　高野美智子

C　本年度の作業

1　日本語教育教材および教授資料の作成

『日本語教育の概観』を作成した。

内容は次のとおりである。

1　日本語教育と国語教育
2　日本語教育の沿革
3　日本語教育機関と教師の状況
4　国内の日本語教育
5　海外の日本語教育
6　日本語教師の養成と研修
7　日本語教師の資格
8　日本語の教授法
9　日本語教科書・教材
10　日本語教育センター及びその他

附載　日本語教員に必要な資質能力とその向上策について ——日本語教育推進対策調査会報告

2　日本語教育映画の制作

今年度制作した日本語教育映画の題名及び規格等は，次のとおりである。

イ　題名

「きりんはどこにいますか」——「いる」「ある」——

「かまくらをあるきます」　——「移動の表現」——

「おかねをとられました」　——「受身の表現１」——

ロ　規格等

規格　16ミリ，カラー，トーキー，１巻５分もの計３巻

企画　国立国語研究所

制作　日本シネセル株式会社

今年度制作された３巻は，それぞれ異なった独自のねらいと特徴をもっている。

「きりんはどこにいますか」では，音声表現と事物がわかりやすく平明に結びつくように努め，それを映像で提示した。

「かまくらをあるきます」では，移動や移動のしかたを表現する動詞をなるべく多く提出し，それぞれの動作を映像化した。

「おかねをとられました」では，二者（あるいは，それにプラスしてそこに介在する事物）の関係を関係者ごとの異なった視点から描写し，映像表現することをめざした。

第１巻は，この基礎日本語教育映画の中でもわりあい早い時期に学習されるものに属し，第２巻は，動詞の導入がすんだ後，ある種の特徴を持つ動詞を集中的に学習することをめざし，第３巻では，受身表現の構文的理解に重点を置き，その後の学習の発展の契機にしようとした。

この映画の制作にあたっては，日本語教育映画等企画協議会を設け，次の諸氏を委員に委嘱して，主題・シナリオの決定，制作の指導等についての協力を得た。

石田敏子（国際基督教大学専任助手）

今田滋子（国際基督教大学助教授）

川瀬生郎（東京外国語大学附属日本語学校教授）

木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

窪田富男（東京外国語大学助教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

なお，49年度制作映画「これはかえるです」――「こそあど」＋「は―です」，「こそあど」＋「が―ある」の解説書は，日向茂男，田中望がそれぞれ担当して執筆を完了した。

D　今後の予定

日本語教授資料作成のための調査研究及び計画の立案にあたる。モデル教材としての日本語教育教材開発については，センターにおける教材開発実験室，録音教材編集室の機器の整備充実に伴い，開発のための実験研究を行う。

なお，これまで全50巻を予定して制作されてきた日本語教育映画基礎編は，その完成まで長年月を要することが考えられるので，当初の基礎編50巻を30巻にまとめることとし，20巻を応用編の制作にあてる予定である。なお，既に完成した映画についての解説を刊行する予定である。

日本語教育研修の実施

A　目　　的

研究所において実施する研修会を充実するために，各種日本語教育機関その他において実施されている日本語教育のための講座・研修会等について，そのあり方及び内容等について種々の資料・情報を得る。

また，日本語教育に現に従事し，または従事しようとする人々に日本語教育の内容や方法について研修の機会を提供し，外国人に対する日本語教育の発展に資するために，現職者研修（日本語教育の経験2年以上の者を対象），初心者研修（日本語教育の経験2年未満の者及び日本語教員になる希望を有する者を対象）の2講座を夏期集中講座として東京会場・大阪会場のそれぞれにおいて開催する。

B　担　当　者

日本語教育部日本語教育研修室（51.10.1 以降は日本語教育センター日本語教育研修室）

部長　野元菊雄（51.10.1 日本語教育センター長）　　室長　武田　祈

研究員　日向茂男，田中　望（51.10.1から）――研修会のあり方及び内容等についての資料及び情報の収集・整理

上記のほ日本語教育部（51.10.1以降は日本語教育センター）の全員――研修会の開催

C　本年度の作業

日本語教育研修の実施

外国人のための日本語教育学会の協力のもとに当研究所の主催により，現職者研修及び初心者研修をそれぞれ東京会場・大阪会場で実施した。

会場・日時・内容等は次のとおりである。

（1）現職者研修

ア　東京会場

会場　オリンピック記念青少年総合センター

日時　昭和51年7月20日（火）～7月24日（土）

内容（講義題目・講師）

日本語と日本語教育　林　大（国立国語研究所長）

社会言語学　野元菊雄（国立国語研究所日本語教育部長）

計量言語学―漢字の機械処理―　斎藤秀紀（国立国語研究所言語計量部第三研究室主任研究官）

対照言語学―朝鮮語と日本語―　志部昭平（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員）

方言学　佐藤亮一（国立国語研究所言語変化研究部第一研究室長）

日本語文法Ⅰ―名詞句の構造―　南不二男（東京外国語大学教授）

日本語文法Ⅱ―動詞について―　鈴木重幸（横浜国立大学教授）

日本語文法Ⅲ―終助詞への表現―　田中章夫（国立国語研究所言語計量部第二研究室長）

演習Ⅰ―文型―　斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

演習Ⅱ―文法―　伊藤芳照（東京外国語大学附属日本語学校教授）

演習Ⅲ―表現―　望月孝逸（千葉大学教授）

視聴覚教材　日向茂男（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研修室研究員）

総括討論　武田祈（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研修室長）

イ　大阪会場

会場　大阪府中小企業文化会館

日時　昭和51年8月3日（火）～8月7日（土）

内容（講義題目・講師）

国語教育と日本語教育　岩淵悦太郎（前国立国語研究所長）

対照言語学　高田　誠（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員）

語の意味変化　吉田金彦（大阪外国語大学教授）

視聴覚教材　日向茂男（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研修室研究員）

外国人のみた日本語　クトット・スラメット・スディアルタ（天理大学客員教授）

連文論　森重　敏（奈良女子大学教授）

実験音声学—日本語のアクセント—　杉藤美代子（大阪樟蔭女子大学教授）

言語と文化　大橋保夫（京都大学教授）

演習Ⅰ—学習困難な語いの問題—　玉村文郎（同志社大学助教授）

演習Ⅱ—文型学習上の問題—　寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

演習Ⅲ—学習者のおちいりやすい誤用例の問題—　佐治圭三（大阪女子大学教授）

演習Ⅳ—言語表現と文化背景の問題—　吉田弥寿夫（大阪外国語大学教授）ほか

（2）初心者研修

ア　東京会場

（会場・日時は現職者研修に同じ）

内容（講義題目・講師）

日本語と日本語教育　林　大（国立国語研究所長）

日本語教育概観　水谷　修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長）

音声と音声教育Ⅰ　大坪一夫（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター助教授），志部昭平（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員），今田滋子（国際基督教大学助教授），高田　誠（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員），杉原正勝（東京外国語大学附属日本語学校講師），土岐　哲（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター講師）

音声と音声教育Ⅱ　土岐　哲（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター講師），今田滋子（国際基督教大学助教授），水谷　修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長），高田　誠（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員）

文法と文法教育Ⅰ　鈴木　忍（東京外国語大学附属日本語学校教授）

文法と文法教育Ⅱ　寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

語いと語い教育Ⅰ　西尾寅弥（国立国語研究所言語体系研究部長）

語いと語い教育Ⅱ　玉村文郎（同志社大学助教授）

視聴覚教材　佐久間勝彦（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター講師）

文字と文字教育　斎賀秀夫（国立国語研究所言語計量部長）

日本語教授法　木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

質疑応答　日向茂男（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研修室研究員）ほか

イ　大阪会場

（会場・日時は現職者研修に同じ）

内容（講義題目・講師）

国語教育と日本語教育　岩淵悦太郎（前国立国語研究所長）

日本語教育概観　水谷　修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長）

文法と文法教育Ⅰ　寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

文法と文法教育Ⅱ　佐治圭三（大阪女子大学教授）

語いと語い教育　阪倉篤義（京都大学教授）

文字と文字教育　武田　祈（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研修室長）

音声と音声教育Ⅰ　水谷　修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長），大坪一夫（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター助教授），山本　進（大阪外国語大学助手），高田　誠（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室研究員）

音声と音声教育Ⅱ　山本　進（大阪外国語大学助手）

視聴覚教材　乙政　潤（大阪外国語大学教授）

待遇表現　宮地　裕（大阪大学教授）

日本語教授法　斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

質疑応答　宮地　裕（大阪大学教授）ほか

なお，研修会の企画，運営，実施等については，東京会場・大阪会場とも研修会運営委員会を設け，東京会場及び大阪会場については，次の諸氏を運営委員に委嘱してその協力を得た。

東京会場

石田正一郎（文化庁文化部国語課長）

伊藤芳照（東京外国語大学附属日本語学校教授）

木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

鈴木　忍（東京外国語大学附属日本語学校教授）

望月孝逸（千葉大学教授）

大阪会場

石田正一郎（文化庁文化部国語課長）

佐治圭三（大阪女子大学教授）

玉村文郎（同志社大学助教授）

寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

宮地　裕（大阪大学教授）

吉田弥寿夫（大阪外国語大学教授）

（3）公開講座

広く，一般に日本語及び日本語教育に関心のある学生，社会人に対しその知識を整理し発展させる機会を提供するものとして，公開講座2回を実施した。

会場・日時・題目及び講師は次のとおりである。

場所　国立国語研究所講堂

日時　昭和52年3月5日（土）　午後2時～4時

日本語の特性　　林　大

日本語教育の概観　　武田　祈

昭和52年3月12日（土）　午後2時～4時

ことばと生活　　野元菊雄

日本語教育の実際　　水谷　修

D　今後の予定

昭和52年度以後，これまで同様の夏季5日間の研修のほかに，長期専門研修を行う予定である。なお，公開講座も実施する予定である。

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

A 目　　的

国語に関する学問の研究成果一般を知り，あわせて関係学会の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために，国語および国語問題に関する情報を収集・整理し，国語研究の基礎的資料を整備する。このために次のことを行う。

1　刊行図書・雑誌論文等の調査を行い，分類別文献目録カードを作成する。

2　諸新聞から関係記事を切り抜いて整理・製本し，研究資料を作成する。

3　『国語年鑑』を編集する。

B 担 当 者

言語変化研究部長　飯豊毅一

文献調査室　研究員　田原圭子　　研究補助員　伊藤菊子　中曽根　仁

C 本年度の作業

前年度に引き続き，昭和51年度に刊行された各種文献を調査し，情報を収集した。昭和51年1月から12月までの情報については分類別文献目録カードおよび「新聞所載国語関係記事切抜集」を作成した。これらの文献の目録は，その他の資料・情報とともに，『国語年鑑』<昭和52年版（1977）>に掲載する。

『国語年鑑』<昭和51年版（1976）>は，50年1月から12月までの国語に関する研究成果，関係学会の動向，ことばに関する世論などをおもな内容としておさめ，第一部展望，第二部文献(刊行図書・雑誌論文・新聞記事ほか)，第三部雑報（各学会・関係諸団体の活動報告ほか)，第四部国語関係者名簿

（国内・国外），第五部資料（その年に告示された公的決定事項など）および編著者名索引に分けて編集し，51年8月に刊行した。

なお，本年度は，『国語年鑑』昭和29年版から51年版までの「刊行図書一覧」「編著者名索引」を編年順にまとめた「国語年鑑掲載文献総目録——刊行図書篇（4分冊），筆者名索引篇（1冊）」を作成した。

以下，国語および国語問題に関して，51年の情報の傾向を知る手がかりとして採録した文献の冊数（または点数）を項目別に示した。（　）内に昭和50年の数を示し，51年の状況と比較できるようにした。

外国発行の刊行図書・雑誌論文等については，前年までと同じく，その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

I　刊行書の調査

国語関係の刊行書について，書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数，ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては，『納本週報』（国立国会図書館），その他の目録から情報を補い，総数860冊についての分類別カード目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語（学）	42	(40)
国語史	59	(36)
音声・音韻	8	(9)
文字・表記	13	(22)
語彙・用語		
語彙・用語	25	(29)
人名・地名	8	(8)
文　法	16	(14)
文章・文体	12	(10)
方言・民俗	113	(117)
ことばと機械	4	(3)
コミュニケーション		
コミュニケーション一般（言語生活）	31	(31)
言語技術（話し方・書き方）	52	(36)
マス・コミュニケーション	5	(8)
国語問題	5	(8)
国語教育		
国語教育一般	15	(39)
学習指導	12	(27)
ことばの指導	0	(0)
文字教育	2	(2)
語彙・文法教育	2	(2)
聞く・話す	0	(0)
読む・読書指導	10	(9)
書く・作文指導	11	(5)

文学教育	15	(6)
古典教育	1	(1)
漢文教育	0	(0)
特殊教育	4	(1)
学力調査	0	(0)
国語教科書その他	8	(1)
幼児の言語発達	7	(3)
外国人に対する日本語教育	10	(6)
言語学その他	63	(72)
辞典・用語集		
辞典・用語集一般	0	(1)
国語辞典	12	(9)
用語辞典・用語集	37	(30)
特殊辞典	22	(25)
索引	13	(19)
資　料		
資料	16	(27)
史料	14	(16)
解題・目録	13	(11)
年鑑	15	(12)
計	695	(695) 冊
追　補		
国語学その他	10	(15)
国語史	11	(3)
音声・音韻	1	(7)
文字・表記	2	(1)
語彙・文法	9	(7)
文章・文体	0	(0)
方言・民俗	21	(21)
ことばと機械	2	(0)
コミュニケーション	12	(9)
マス・コミュニケーション	0	(11)
国語問題	1	(0)
国語教育	11	(21)
外国人に対する日本語教育	6	(10)
言語学その他	46	(23)
辞典・索引・資料	33	(35)
総計	860	(858) 冊

II　雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物や雑誌から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編，『ＬＬＢＡ』(Language and Language Behavior Abstracts)，その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，3,089点に達した。（連載物については，各回ごとに１点と数えることはせず，その題目について１点と数えた。）

1　一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録から採録した分は含まない。）

a　一般刊行雑誌（学会誌等を含む）……414（403）種

国語・国文・言語ほか	154	(150)
方言・民俗	13	(12)
国語問題	5	(6)
国語教育	22	(20)
日本語教育	5	(6)
マス・コミ関係	11	(12)
外国語	12	(11)
週刊誌・総合誌	0	(2)
文芸・詩歌・芸能	9	(8)
その他（教育・社会学・心理学ほか）	86	(80)
臨時に入った雑誌	36	(32)
外国誌	61	(64)

b　大学・研究所等の紀要・報告類……284（264）種

2　論文・記事の分類とその点数

国語（学）		
国語（学）一般	156	(179)
時評・随筆	70	(49)
国語史		
国語史一般	66	(38)
訓点資料関係	6	(7)
音声・音韻		
音声・音韻一般	58	(60)
史的研究	34	(18)
アクセント・イントネーション	9	(11)
文字・表記		
文字・字体	49	(12)
表記	40	(31)
語彙・用語		
語彙・用語一般	97	(122)
古語	47	(53)
現代語	24	(15)
新語・流行語	6	(2)
外来語	0	(3)
人名・地名	38	(20)
辞書・索引	49	(44)
文　法		
文法上の諸問題（現代語法）	58	(72)
史的研究	32	(21)
敬語法	27	(25)
文章・文体		
文章・表現一般	45	(22)
史的研究	84	(51)
古典の注釈		
注釈一般	0	(0)
上代	19	(35)
中古	17	(9)
中世	5	(9)
近世以降	5	(3)
方言・民俗		
方言一般	20	(24)
各地の方言		
東部	38	(38)
西部	14	(18)
九州・沖縄	15	(25)
民俗	7	(12)
ことばと機械		
言語情報処理	34	(23)
研究用機器	4	(3)
コミュニケーション		
コミュニケーション一般	66	(39)
言語生活	55	(60)
言語活動		

言語活動一般	74	(36)
書く・読む	42	(37)
話す・聞く	14	(9)
マス・コミュニケーション		
一般的問題	2	(8)
新聞	3	(6)
放送	39	(31)
広告・宣伝	6	(4)
印刷・出版	0	(0)
国語問題		
国語問題一般	53	(53)
表記法	15	(37)
国語教育		
国語教育一般	135	(132)
国語教育史	12	(12)
学習指導	159	(157)
ことばの指導	13	(1)
文字・表記教育	5	(14)
語彙教育	0	(3)
文法教育	20	(17)
聞く・話す	2	(1)
読む・書く		
読む・書く一般	12	(34)
読解指導	8	(39)
読書指導	34	(9)
作文指導	100	(47)
文学教育	51	(21)
古典教育	8	(6)
漢文教育	3	(5)
特殊教育	17	(21)
学力評価	19	(5)
国語教科書・教材研究	76	(23)
幼児の言語発達	22	(28)
外国人に対する日本語教育	53	(64)
言語（学）		
言語一般	108	(106)
意味	10	(6)
比較研究	34	(23)
翻訳の問題	9	(24)
外国語研究	11	(22)
外国語教育（学習）	76	(60)
各国の言語問題（教育）	15	(28)
言語障害研究	21	(43)
資　料		
資料一般	30	(12)
国語資料	5	(16)
翻刻	20	(12)
目録	3	(8)
書評・紹介		
国語学その他	21	(33)
音声・音韻	3	(3)
文字・表記	1	(0)
語彙・用語	13	(12)
文法	11	(13)
文章・文体	7	(4)
方言・民俗	17	(5)
ことばと機械	0	(0)
コミュニケーション	5	(7)
マス・コミュニケーション	0	(4)
国語問題	0	(0)
国語教育	11	(21)
外国人に対する日本語教育	3	(2)
言語学その他	33	(40)
計	2,758	(2,517) 点

追　補		
国語学その他	11	(27)
国語史	7	(19)
音声・音韻	12	(28)

文字・表記	8	(8)
語彙・用語	37	(36)
文法	16	(26)
文章・文体	12	(14)
古典の注釈	3	(5)
方言・民俗	19	(12)
ことばと機械	0	(0)
コミュニケーション	37	(6)
マス・コミュニケーション	0	(0)
国語問題	4	(1)
国語教育	34	(19)
外国人に対する日本語教育	8	(2)
言語学その他	108	(55)
資料	9	(6)
書評・紹介	6	(6)
総計	3,089	(2,787) 点

Ⅲ　新聞記事の調査

下記の諸新聞から，関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し，資料として保存し，閲覧に供している。

切り抜き点数は 3,217 点で，その内訳は次のとおりである。

1　新聞の種類と切り抜き点数

日（夕）刊紙		
朝　日	362	(453)
毎　日	410	(346)
読　売	651	(584)
東　京	315	(497)
サンケイ	569	(395)
日本経済	164	(159)
北海道	205	(175)
西日本	242	(155)

週刊・その他		
日本読書新聞	64	(32)
週刊読書人	78	(75)
図書新聞	42	(27)
新聞協会報	61	(51)
教育学術新聞	14	(14)
その他	40	(84)
計	3,217	(3,048) 点

2　月別の切り抜き点数

1月	266 (185)	2月	222 (257)	3月	294 (272)
4月	324 (248)	5月	343 (224)	6月	275 (264)
7月	239 (278)	8月	223 (258)	9月	192 (207)
10月	290 (328)	11月	303 (299)	12月	246 (228)

3　新聞記事の分類とその点数

国語（学）一般	289	(397)
音声・音韻	28	(31)
文　字		
文字・表記	55	(98)
活字	10	(8)
語　彙		

語彙一般	90	(107)
各種用語	51	(90)
新語・流行語・隠語	130	(147)
外国語・外来語	40	(35)
辞書	42	(29)
問題語・命名	106	(95)
人名・地名	47	(63)
文　法	14	(0)
文　体		
文体・表現	23	(29)
方　言		
方言一般	98	(49)
方言と標準語	4	(7)
各地の方言	17	(17)
言語生活		
言語生活一般	168	(79)
ことばの問題	61	(84)
ことばづかいの問題	17	(17)
敬語の問題	80	(43)
言語活動		
言語活動一般	42	(23)
話すこと（聞くこと）	35	(67)
書くこと（読むこと）	21	(22)
読書	60	(43)
ことばと機械	19	(16)
国語問題		
国語問題一般	58	(54)
表記の問題		
表記一般	61	(35)
当用漢字など	72	(108)
かなづかい	39	(2)
送りがな	4	(5)
かな書き	4	(3)
横書き・縦書き	10	(2)
人名・地名の表記	22	(18)
外来語表記	62	(15)
ローマ字	30	(9)
国語教育		
国語教育一般	100	(80)
学習指導の問題		
学習指導一般	14	(29)
話す（聞く）	12	(2)
読む（読書指導）	19	(17)
書く（作文指導）	12	(11)
文学・古典教育	9	(7)
特殊教育	27	(27)
視聴覚教育	7	(3)
学力テスト	14	(21)
幼児語教育	29	(38)
ローマ字教育	1	(3)
言語学		
言語学一般	52	(50)
外国語一般	70	(94)
比較研究	79	(90)
翻訳の問題	52	(39)
外国語教育	86	(79)
外国語に関する紹介ほか	43	(41)
日本語の研究と教育	64	(80)
マス・コミュニケーション		
コス・コミ一般	53	(70)
新聞	17	(50)
放送	36	(44)
広告・宣伝	44	(60)
出版	143	(62)
書評・紹介ほか	325	(205)
計	3,217	(3,048) 点

切り抜き点数は，昨年より160点あまり多かった（くわしくは『国語年鑑』<52年版>に掲載。）ことしも昨年に引き続き，各紙に国語に関する連載記事

があった。それは，分類項目の点にも反映している。そのなかの顕著な例を，昨年に比して点数の多くなっている項目から示すと，「方言一般」は『西日本新聞夕刊』に「魚の方言」のコラムがあったことによる。「言語生活一般」は『読売新聞』に「手紙が書けない」の題で手紙に関しての連載があり，主としてこの項に分類されたことによる。「かなづかい」,「外来語表記」,「ローマ字」,「敬語の問題」などは『読売新聞』の「日本語の現場」にそれぞれ関係記事が連載されたことによる。

「国語（学）一般」,「当用漢字など」,「新聞」などの項目の点数が昨年より少なくなっているが，昨年はこれらに関する連載記事があったが，今年は上記のように主題が変ったことの反映である。

〔付　所外からの質問について〕

昭和51年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計＼月	51年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	52年1月	2月	3月
1,254	94	114	125	113	104	90	111	94	110	97	107	95

（前年度の質問件数は1,116件であった）

質問の内容は，例年どおり多方面にわたっていた。件数の多かったものを示すと次のとおりである。用字用語について351件（用字一般119件，用語一116般，同音類義語80件），漢字の読み174件（姓名に関して69件），字体60件，送りがな44件，文献の紹介依頼43件，表記一般35件などである。

上記の件数のうち，同一（または，同類）の内容について二回以上質問を受けた事項を，かなづかい，送りがな，字体，同音類義語の使い分けから例示する。

かなづかい		いずれ	2	表（現）す	3
こんにちは	7	送りがな		終わる	2
基づく	2	行う	7	当たる	2
～どおり	2	話し	3	同音類義語	

異常・異状	4	初める・始める	2	字　体	
替える・換える	4	目指す・目差す	2	塚・塚	6
情勢・状勢	3	受章・受賞	2	吉・吉	4
体制・態勢	3	街・町	2	燈・灯	3
				辶・辶	7

このほか「ニホンとニッポン」6件，例えば「何か月」などの表記に「ケ」を使うことの是非について8件などがあった。

なお，研究所および研究所の刊行物についての照会が93件あった。電話による質問のほかには，はがき・封書による質問が16通，直接来所しての質問が5件ほどあった。

以上の件数は，すべて文献調査室で受けた質問で，所員が個人的に受けた質問は含んでいない。

科学研究費補助金による研究

表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究

（代表　飯豊毅一）（総合研究B）

＜研究目的＞

国立国語研究所編『日本言語地図』の完結によって，主として語彙に関する精密詳細な全国的分布状況が明らかにされた。しかしながら，文法項目を中心とする表現法に関しては，臨地調査にもとづく全国的規模の詳細な調査報告はほとんどなく，将来，この方面についての大規模な調査研究を行うことが必要と考えられる。各地の言語的特性に対応した標準語教育を行うためにも，表現法の全国的地域差が明らかにされることが望ましい。

ところで，とくに表現法の調査では，個々の事象に関して意味領域などを限定して質問することが困難であり，その調査方法も，まだ十分に開拓されていない。今日，標準語の強力な浸透によって各地の言語生活は錯綜した状況を呈しており，使用場面によって個々人が多様な表現をとることが多いが，この点についても十分な配慮をしなければならない。したがって，全国各地の方言研究者の協力のもとに，各地域の文法的特徴や言語生活の様相を十分に把握した上で，適切な調査方法を用意する必要がある。

この研究は，全国各地の方言研究者を共同研究者として，各研究者がそれぞれの地域ごとの問題点を把握し，実験的調査を行った上で，全国的な調査を実施する際の調査のあり方について総合的に検討することを目的とする。研究期間は1か年である。

＜調査の組織＞

各地区担当の分担者・協力者

井上　史雄	北海道大学	上野　善道	弘前大学
本堂　　寛	岩手大学	加藤　正信	東北大学
W.A.グローターース	東京都在住	加治工真市	東京都立大学

佐藤　茂　福井大学
馬瀬　良雄　信州大学
佐藤　虎男　大阪教育大学
室山　敏昭　広島大学
奥村　三雄　九州大学
上村　孝二　鹿児島短期大学
川本栄一郎　金沢大学
山口　幸洋　静岡県在住
鏡味　明克　岡山大学
吉田　則夫　高知大学
神部　宏泰　佐賀大学

国立国語研究所所属の担当者

飯豊　毅一　（言語変化研究部長）
佐藤　亮一　（言語変化研究部第一研究室長）
真田　信治　（言語変化研究部第一研究室員）
沢木　幹栄　（言語変化研究部第一研究室員）

＜実施の概要＞

1．調査方法上の全体的な問題点について，本部（国立国語研究所）所属の研究者が検討し，その中の一部の問題点について，具体的な実験的小調査の計画を立案した。

2．1の結果にもとづいて全国共通の調査票を作成し，各地域で小調査を実施した。調査の内容は，1地点で5人の老年層の話者を選び，同一の項目を「なぞなぞ式」「標準語翻訳式」「語形選択式」「対話式」など，質問法を変えて調査し，1地点の個人差や，1個人の質問法の違いによる結果のゆれを考察することを目的とするもの，そのほかであった。なお，実験的小調査とは別に，各分担者に調査方法上の全般的な問題点に関するレポートを求めた。調査結果およびレポートは本部に集められ，本部ではそれを整理・分析して全体会議に必要な資料を作成した。

3．52年3月18日，国立国語研究所において研究分担者・協力者が会合し，実験的調査によって得られた各地の具体的資料にもとづいて総合的な観点からの検討を加え，次年度以降に申請している科学研究費による全国的規模の調査への見通しを立てた。

幼児・低学年児童の語彙調査（代表　芦沢　節）（一般研究A）

＜研究目的および担当＞

近年，幼児・児童の心身の発達は大きく変貌しつつあり，それらを実証する資料も一部にはあるが，知的発達の中心をなす言語発達，なかでも，語彙量については，ほとんど十分な資料を得ていない。また，昭和20年代以降，テレビの出現をはじめ，幼児向けの出版物などの盛行による文化的な環境の変化，および核家族化に代表される家族構成の変化などの影響を受けて，幼児・児童の語彙習得の方法や内容が著しく変容していると予想されるが，実証はされていない。

そこで，現代の幼児・低学年児童が「どれだけの語彙量を持っているか」「どんな内容の語彙か――語彙体系はどんなか」など，幼児・低学年児童における語彙の実態・特色を現時点で明らかにし，今後の語彙教育に，多少なりと資することを期して，この研究をとりあげた。

そのために，3年計画により，第1年次準備調査（方法論の検討），第2年次本調査（東京の一般的文化水準の環境にある幼児・児童を対象とする調査），第3年次比較調査（異なる言語＜方言＞地域における幼児・児童を対象とする調査）を実施する予定である。

担当者

芦沢　節　（言語教育研究部長）

村石昭三　（言語教育研究部第一研究室長）

大久保愛　（言語教育研究部第一研究室主任研究官）

岩田純一　（言語教育研究部第一研究室員）

神部尚武　（言語行動研究部第三研究室長）

斎藤秀紀　（言語計量研究部第三研究室主任研究官）

また，調査の実施に当たっては，次の幼稚園，小学校の協力を得た。

道灌山幼稚園　　園長　高橋系吾

府中第六小学校　　校長　吉田英男

＜調査の概要＞

調査の項目として，(1)24時間調査 (2)誕生月追跡調査 (3)語彙理解調査 (4)

語彙連想調査 (5)言語生活アンケート調査などを実施するが，本年度は準備調査のため，それぞれの調査項目について，本調査に必要な調査方法の検討・確立につとめた。

その結果，各調査項目について，方法上の得失を知ることができたが，語彙量に個人差の多い幼児・低学年児童に対して，多人数を調査する場合は，特に，誕生月追跡調査(2)，語彙連想調査(4)が，本調査を進める上で有効な方法であることが認められた。また，語彙連想調査など，小学生の予備調査に基づき，調査方法（連想制限時間，教示法）を改良し，幼児にも個別テストによる調査の可能性があること，およびテストに際し，連想語彙量と知能との関連，頭音の種類による連想量の多少，発想の過程や類型等を考慮に入れる必要があることなどが確かめられた。

語彙連想調査の結果から＜集計整理のできた段階までの＞

清音（語頭の直音）44音（「を」を除く）についての語彙連想テスト

被験者　小学校2年生（150名　集団テスト）

テストA，B，C，D，Eの5群* に分けて実施した。

A（語頭音のみを示し，その音から連想した語を自由に記入させる。11音）

B（　〃　11音）

C（語頭音を示し，かつ，品詞別の語例を示して，語彙の品詞を意識させて連想した語を記入させる。11音）

D（　〃　11音）

E（「おかあさん」「がっこう」などの語を示し，それから連想した語を記入させる）

所用時間　（イ）　3分（1回めの記入中止までの時間）

（ロ）　4分（＜イ＞のあと1分を加えた時間）

＊語頭音44音を，ＡＢＣＤの4群に11音ずつ等分し，A・BとC・Dとはテストの教示条件をかえる。Eは，具体的に語例を示してテストする。

結果の一部

連想語数の多い語頭音*

音	平均語数（4分）	平均語数（3分）	名詞 (4分)/(3分)	動詞 (4分)/(3分)	形容詞 (4分)/(3分)	副詞 (4分)/(3分)	その他 (4分)/(3分)
か	16.77	14.07	13.37 / 11.43	1.90 / 1.50	0.50 / 0.43	0.23 / 0.20	0.80 / 0.53
た	15.97	12.83	11.73 / 9.33	2.17 / 2.13	0.53 / 0.43	0.37 / 0.27	1.17 / 0.80
あ	15.63	12.71	13.40 / 11.37	1.06 / 0.74	1.14 / 0.43	0 / 0	0.25 / 0.17
は	14.95	12.76	11.54 / 9.95	2.00 / 1.68	0.11 / 0.08	0.08 / 0.05	1.24 / 1.00
こ	14.69	11.63	11.91 / 9.60	0.66 / 0.51	0.09 / 0.06	0.46 / 0.37	1.63 / 1.09
い	14.57	12.00	9.70 / 8.13	2.33 / 1.97	0.57 / 0.37	0.40 / 0.37	1.63 / 1.17
き	13.87	11.73	11.03 / 9.51	0.89 / 0.68	0.38 / 0.32	0.08 / 0.08	1.57 / 1.19
し	13.83	10.00	11.11 / 7.77	1.03 / 0.83	0.03 / 0.03	0.29 / 0.26	1.37 / 1.17
ゆ	13.77	11.60	9.83 / 8.43	2.10 / 1.90	0.30 / 0.20	0.33 / 0.27	1.20 / 0.77
な	13.49	11.30	8.30 / 7.14	2.11 / 1.73	0.70 / 0.57	0.11 / 0.11	2.30 / 1.76

連想語数の少い語頭音*

音	平均語数（4分）	平均語数（3分）	名詞 (4分)/(3分)	動詞 (4分)/(3分)	形容詞 (4分)/(3分)	副詞 (4分)/(3分)	その他 (4分)/(3分)
る	3.97	3.31	3.34 / 2.86	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0.63 / 0.46
り	6.33	5.50	5.97 / 5.17	0 / 0	0.03 / 0.03	0.07 / 0.07	0.27 / 0.27
れ	6.68	5.70	6.22 / 5.32	0.03 / 0.03	0 / 0	0 / 0	0.43 / 0.35
ぬ	7.00	5.97	3.51 / 3.34	2.54 / 1.77	0.11 / 0.11	0.40 / 0.40	0.43 / 0.34
ら	7.17	6.10	6.07 / 5.10	0.17 / 0.17	0.07 / 0.03	0.03 / 0.03	0.87 / 0.77
そ	7.35	6.27	6.51 / 5.81	0.08 / 0.05	0 / 0	0.08 / 0.05	0.68 / 0.35
ね	7.40	6.33	5.43 / 4.60	1.46 / 1.30	0.10 / 0.07	0 / 0	0.40 / 0.37
ろ	7.47	6.43	6.67 / 5.93	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0.80 / 0.50
も	7.70	6.80	6.13 / 5.53	0.63 / 0.57	0.03 / 0.03	0.46 / 0.36	0.40 / 0.30
ひ	8.27	6.76	6.95 / 5.92	0.70 / 0.62	0.14 / 0.11	0.03 / 0	0.22 / 0.08

*　連想語数の多少に関する認定及び順位は，4分間の連想語数の平均による。

52年度は，準備調査で得た方法論に基づき，本調査を実施する予定である。

現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究（代表　斎賀秀夫）

（一般研究A）

＜研究目的＞

漢字の重要度の段階づけを試みるとともに，その妥当性を実態調査・意識調査によって確かめ，これらの研究成果の上に立って，現代語表記における漢字の役割を実験によって明らかにしていくことを目的とする。

＜研究組織＞

この研究には，言語計量研究部に属する８名の研究員が参加し，下記のように研究を分担した。

斎賀秀夫（研究代表者）……（１）調査研究の総括

田中章夫　佐竹秀雄……（２）漢字使用の実態についての研究

土屋信一　中野洋　鷹岡昭夫……（３）漢字使用の意識についての研究

斎藤秀紀　米田正人……（４）漢字使用の数理言語学的研究

上記のうち，米田は途中で配置換え（51.５.１言語行動研究部へ）になったが，研究分担は続けた。なお，京都府立大学の寿岳章子・樺島忠夫の両教授に，実態調査について協力を得た。

＜実施の概要＞

１）現代語の表記における各漢字のウエイトを測る統計的尺度として，カバー率を設定し，国立国語研究所の雑誌語彙調査データに現れた漢字について，基本度の段階づけを試みた。

２）学生・社会人を対象として，漢字の使い分けの実態や，用字についての意識を，東京・京都・神戸・北九州市等の各地で調査し，表記の個人差の生ずる要因を分析した。

３）高校教科書の文章の文字のエントロピー（連続確率）を，コンピュータで計算し，現代語表記の成立条件を分析するための資料として，エントロピー表を作成した。

以上の研究結果を『現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研

究（中間報告）』としてまとめたほか，下記の研究成果を発表した。

「表記のゆれを測る尺度について（佐竹秀雄）」『計量国語学』（80号）

「現代漢字の機能（斎賀秀夫）」文化庁主催・国語問題研究協議会

「漢字調査における統計的尺度の問題（田中章夫）」『電子計算機による国語研究』（報告59）

「表記のゆれを測る（佐竹秀雄）」『電子計算機による国語研究』（報告59）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき，研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集，整理し，利用に供した。

また，例年のとおり，各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和51年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は，次のとおりである。

図書

受入……2,097冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和書	977	350	365	41	1,733
洋書	221	13	112	0	346
計	1,198	363	477	41	2,079

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……638種

	購入	寄贈	計
和	50*	524	574
洋	43	21	64
計	93	545	638

＊新聞（5種）を含む

庶　務　報　告

I　庁舎および経費

1 庁　舎

所　在　東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷　地　10,030m²

建　物

日本語教育センター等庁舎（51.10　落成） 鉄筋コンクリート地上5階地下1階建	（延）	5,719m²
渡廊下　鉄筋コンクリート		38m²
研究棟　鉄筋コンクリート3階建	（延）	3,015m²
（旧）図書館　鉄筋コンクリート平屋建書庫積層	（延）	213m²
日本語教育センター別館　鉄筋コンクリート2階建	（延）	238m²
語彙カード室　鉄筋コンクリート平屋建		106m²
その他付属建物	（延）	292m²
計	（延）	9,621m²

2 経　費

昭和51年度予算額

人件費	267,310,000円
事業費	175,911,000円
各所修繕費	232,000円

II　評議員会（昭和52年2月1日現在）

会長　有光次郎	副会長　佐伯梅友
石井庄司	石井良助
市古貞次	岩淵悦太郎

岩村　忍	江尻　進
遠藤嘉基	小川芳男
堀　四志男	何　初彦
坂井利之	沢田慶輔
田中千禾夫	千葉雄次郎
徳永康元	中村光夫
福島慎太郎	頼　惟勤

Ⅲ　組織と職員

1　定員　78名

2　組織および職員（昭和52年３月31日現在）

	職　名	氏　名	備　考
国立国語研究所	所　長	林　大	51.11.29～52.1.27日本語教育センター長事務代理
庶務部	部　長	荻原　湜	
庶務課	課　長	中満　知生	
	課長補佐	国井　和朗	
	庶務係長	菊地　貞	
		岡本　まち	
		荒川佐代子	
	併　任	田島　正幸	
会計課	課　長	渡部　新一	
	課長補佐	広瀬　二朗	
		金田　とよ	
	経理係長	山本　光夫	
		岩田　茂男	
	用度係長	中村　佐仲	
		加藤　雅子	
		木村　権治	
		鈴木　亨	

		安藤信太郎	
		浅香　忠雄	
	非常勤	小原ちい子	(51. 4. 1～52. 3. 30)
	〃	中山　典子	(51. 4. 1～52. 3. 30)
図書館		大塚　通子	
		塚田　吉彦	
言語体系研究部	部長	西尾　寅弥	
第一研究室	室長	高橋　太郎	
		工藤　浩	
		鈴木美都代	
第二研究室	室長	宮島　達夫	
		村木新次郎	49. 9. 1～51. 8. 31 外国出張(西ドイツ) 51. 9. 1～52. 3. 24 外国出張のため休職(西ドイツ)
		高木　翠	
言語行動研究部	部長	渡辺　友左	51. 4. 1 昇任 言語行動研究部第二研究室長事務取扱
第一研究室	室長	中村　明	
		杉戸　清樹	
		塚田実知代	(旧姓　林)
第二研究室	室長	渡辺　友左	
	主任研究官	江川　清	
		米田　正人	51. 5. 1 言語計量研究部第三研究室から配置換
		堀江よし子	51. 5. 1 言語行動研究部第一研究室から配置換
	非常勤	南　不二男	52. 1. 10～52. 3. 31(東京外国語大学教授)
	併任	高野美智子	51. 4. 1 採用
第三研究室	室長	神部　尚武	52. 3. 15～53. 3. 14 文部省在外研究員(米国，カナダ，メキシコ)
	主任研究官	上村　幸雄	51. 4. 1 琉球大学に転出
		高田　正治	
	非常勤	小原美恵子	(51. 4. 1～52. 3. 30)
言語変化研究部	部長	飯豊　毅一	
第一研究室	室長	佐藤　亮一	

		真田　信治	
		沢木　幹栄	51.4.1 東京大学から転入
		白沢　宏枝	
第二研究室	室　　長	飛田　良文	
	主任研究官	梶原滉太郎	51.10.1 昇任
		中山　典子	
		田原　圭子	文献調査室
		伊藤　菊子	〃
		中曽根　仁	〃
言語教育研究部	部　　長	芦沢　　節	
第一研究室	室　　長	村石　昭三	
	主任研究官	大久保　愛	
		岩田　純一	
		川又瑠璃子	
	非常勤	福沢　周亮	52.1.13～52.3.31(東京教育大学助教授)
言語計量研究部	部　　長	斎賀　秀夫	51.4.1～51.8.1 言語計量研究部第三研究室長事務取扱
第一研究室	室　　長	土屋　信一	
		中野　　洋	
		鷲岡　昭夫	
		長田　厚子	
		堀江久美子	
第二研究室	室　　長	田中　章夫	
		佐竹　秀雄	
		大滝　弘美	
第三研究室	室　　長	石綿　敏雄	51.4.1 茨城大学に転出
	室　　長	野村　雅昭	51.8.1 筑波大学から転入
	主任研究官	斎藤　秀紀	
		田中　卓史	52.1.1 九州大学から転入
		米田　純子	
		科野　千夏	

		小高　京子	
		沢村都喜江	
			日本語教育部（49.4.11～51.9.30）
			日本語教育センター（51.10.1 発足）
日本語教育センター	センター長	野元　菊雄	51.4.1 日本語教育部長に配置換 51.10.1 日本語教育センター長に配置換 51.10.28～51.11.9 日本語教育研究室長事務代理 51.11.29～52.1.27 外国研修旅行（ソ連邦）
日本語教育研究室	室　長	水谷　修	51.10.28～51.11.9 外国研修旅行（米国） 51.10.1 日本語教育研究室長から日本語教育センター日本語教育研究室長に配置換
	主任研究官	高田　誠	51.10.1 日本語教育研究室から日本語教育センター日本語教育研究室に配置換 51.10.1 昇任
		志部　昭平	51.10.1 日本語教育研究室から日本語教育センター日本語教育研究室に配置換
日本語教育研修室	室　長	武田　祈	51.10.1 日本語教育研修室長から日本語教育センター日本語教育研修室長に配置換
		日向　茂男	50.10.1 日本語教育研修室から日本語教育センター日本語教育研修室に配置換
		田中　望	51.10.1 採用
		田島　正幸	51.10.1 日本語教育研修室から日本語教育センター日本語教育研修室に配置換
		高野美智子	51.4.1 言語行動研究部第二研究室から

3　名誉所員

西尾　実　（初代所長　昭24.1.31～35.1.22在任）

岩淵悦太郎　（2代所長　昭35.1.22～51.1.16在任）

Ⅳ　昭和51年度の事業等

(1)　刊行書

比喩表現の理論と分類（報告57，秀英出版刊）

幼児の文法能力（報告58，東京書籍刊）

電子計算機による国語研究Ⅷ（報告59）

国立国語研究所年報—27—（昭和50年度）

国語年鑑（昭和51年版，秀英出版刊）

日本語教育の概観

(2) 日本語教育映画の制作および普及

今年度制作した日本語教育映画（16ミリ，カラー，5分もの）の題名は下記のとおりである。

第8巻　きりんはどこにいますか　—「いる」「ある」—

第9巻　かまくらをあるきます　—移動の表現—

第10巻　おかねをとられました　—受身の表現1—

これらは，北海道，宮城県，愛知県，京都府，大阪府，兵庫県，広島県，福岡県各教育委員会および都立日比谷図書館に寄贈した。なお，これらの映画フィルムは，需要によってビデオ化して頒布することができるようになっている。

(3) 国立国語研究所日本語教育センター等庁舎落成式

日時　昭和51年11月18日（木）午後2時30分～　（来会者約270名）

場所　講堂

あいさつ	国立国語研究所長	林　大
	文化庁長官	安嶋　彌
工事報告	関東地方建設局営繕部長	野村　彬
感謝状贈呈		
祝　辞	文部大臣	永井　道雄
	外国人のための日本語教育学会会長	小川　芳男（代読　木村　宗男）
庁舎視察		
祝　宴	三階図書館閲覧室	

(4) 国立国語研究所日本語教育センター公開講座 (68ページ参照)

日本語と日本語教育 (来会者120名)

第1回 昭和52年3月5日(土)

第2回 昭和52年3月12日(土)

(5) 日本語教育研修会 (64ページ参照)

現職者研修および初心者研修をそれぞれ東京会場，大阪会場で実施した。

東京会場

会場 オリンピック記念青少年総合センター

日時 昭和51年7月20日(火)～7月24日(土)

大阪会場

会場 大阪府中小企業文化会館

日時 昭和51年8月3日(火)～8月7日(土)

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
Andrei Limarga インドネシア大学文学部講師(インドネシア)	日中「漢字」音の比較研究	昭和51年6月7日から 昭和52年月6日6まで

2 内地留学生

氏名	勤務・職名	研究題目	研究期間
新谷 重之	千葉県立浦安高等学校教諭	国語学習の効果を高めるスキルについて	昭和51年4月1日から 昭和52年3月31日まで
吉井 量人(かずと)	栃木県立宇都宮女子高等学校教諭	(1)近代語の成立課程の通時的研究 (2)現代語の文字・表記の研究	昭和51年4月1日から 昭和52年3月31日まで

Ⅵ 日 記 抄

1976. 4. 5　西ドイツ　マンハイムドイツ語研究所ユッタ・キューナスト氏来所

15　国会議員　公明党有島重武氏来訪

27　文部省所轄附置研究所事務長会議総会世話人会（東工大）

6. 1　文部省所轄研究所長会議（東条会館）

2～3　第35回　文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議総会（学士会館）

4　第27回　文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会（学士会館）

10　文化庁附属機関庶務会計部課長会議（文部省）

15　第90回　国立国語研究所評議員会（如水会館）

28　コロンビア大学　ノスコ氏他２名来訪

7. 1　大蔵省主計局木島主査及び文化庁会計課長（中西）氏来訪

7　フンボルト大学　ユルゲン・ベルント氏来訪

20　日本語教育初心者および現職者研修（20～24）開催（オリンピック記念青少年総合センター）

8. 3　日本語教育初心者および現職者研修（３～７）開催（大阪府立中小企業会館）

30　西ドイツ　ボン大学語学教育センター所長ハインリッヒ・ケルツ教授来訪

9.13　モスクワ国際関係大学教授　S.V.ネヴェロフ氏夫妻来訪

20　昭和51年度　秋季文部省所轄研究所長会議（20～21）（緯度観）

22　日仏言語学シンポジウム参加者　パリ第４大学　ポッチイエ教授，パリ第７大学　キュリオリ教授，フランス大使館リガロフ文化参事官ほか来訪

29　第27回　文部省所轄機関事務協議会（29～30）（大洲青年の家）

10. 1　日本語教育センター発足

11.11　文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（第３部会）（11～12）（奈良文化会館）

18	国立国語研究所日本語教育センター等庁舎落成式
20	山形県西置賜郡飯豊町添川小学校長今野孝和氏ほか来訪
11.30	国立国語研究所名誉所員に関する内規（所長裁定）を制定前西尾実，岩淵悦太郎両所長が名誉所員となった
12. 1	文部省所管研究所第三部会事務協議会（1～2）（学士会館）
〃	カルカッタ大学マリック教授来訪
2	角井文化財保護部長来訪
13	日仏会館研究員パリ第三大学　東南アジア研究資料センター所員　メテーリエ氏来訪
20	創立記念日　記念講演・講師　沢田慶輔氏（国研会議室）
1977. 1.25	健康安全管理状況監査（国研会議室）
28	米国カリフォルニア，ゼロックス社　ウィルアム・イングリッシュ氏来訪
2.23	第91回　国立国語研究所評議員会（国研会議室）
25	文部省所轄研究所事務協議会（教育会館）
3. 5	日本語教育公開講座（国研講堂）
14	コペンハーゲン大学生他15名来訪
15	文化庁附属機関長会議（教育会館）
22	各省直轄研究所長連絡協議会（農林年金会館）

昭和52年 9 月

国 立 国 語 研 究 所

〒115　東京都北区西が丘 3—9—14
電話東京 (900) 3111 (代表)

UDC　058 : 809.56
NDC　810.5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	700円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	品切れ
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	180円
7	入門期の言語能力	〃	品切れ
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学生の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字 (1) ——総記および語彙表——	〃	〃
22	現代雑誌九十種の用語用字 (2) ——漢字表——	〃	1.000円

23	話しことばの文型(2) ——独語資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) ——分　析——	〃	〃
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本言語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本言語地図(2)	〃	〃
30-3	日本言語地図(3)	〃	〃
30-4	日本言語地図(4)	〃	8,000円
30-5	日本言語地図(5)	〃	9,000円
30-6	日本言語地図(6)	〃	10,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円

45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究（Ⅳ）	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅳ）	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究（Ⅴ）	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究（Ⅵ）	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言語使用の変遷 (1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究（Ⅶ）	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	1,300円
56	現代新聞の漢字	〃	3,000円
57	比喩表現の理論と分類	秀英出版刊	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究（Ⅷ）	秀英出版刊	1,300円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目（昭和17～24年）	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,600円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査（中間報告）	〃	500円
9	牛店雑談 安愚楽鍋用語索引	〃	1,500円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	750円

3	ことばの研究	第3集	〃	品切れ
4	ことばの研究	第4集	〃	1,300円
5	ことばの研究	第5集	〃	1,300円

国立国語研究所年報　秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	15	昭和38年度	250円
2	昭和25年度	〃	16	昭和39年度	品切れ
3	昭和26年度	160円	17	昭和40年度	250円
4	昭和27年度	160円	18	昭和41年度	300円
5	昭和28年度	品切れ	19	昭和42年度	300円
6	昭和29年度	200円	20	昭和43年度	品切れ
7	昭和30年度	品切れ	21	昭和44年度	〃
8	昭和31年度	〃	22	昭和45年度	400円
9	昭和32年度	〃	23	昭和46年度	450円
10	昭和33年度	〃	24	昭和47年度	450円
11	昭和34年度	〃	25	昭和48年度	品切れ
12	昭和35年度	350円	26	昭和49年度	600円
13	昭和36年度	160円	27	昭和50年度	700円
14	昭和37年度	220円	28	昭和51年度	

国語年鑑　秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和41年版	1,100円
昭和30年版	〃	昭和42年版	1,100円
昭和31年版	〃	昭和43年版	品切れ
昭和32年版	〃	昭和44年版	1,500円
昭和33年版	〃	昭和45年版	1,500円
昭和34年版	〃	昭和46年版	2,000円
昭和35年版	〃	昭和47年版	2,200円
昭和36年版	800円	昭和48年版	2,700円
昭和37年版	品切れ	昭和49年版	3,800円
昭和38年版	〃	昭和50年版	3,800円
昭和39年版	980円	昭和51年版	4,000円
昭和40年版	1,100円	昭和52年版	4,500円

日本語教育教材

1	日本語と日本語教育 —国語シリーズ別冊3—	国立国語研究所 文化庁 共編	大蔵省印刷局刊	650円
2	日本語と日本語教育 —国語シリーズ別冊4—		大蔵省印刷局刊	850円

高校生と新聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

日本語教育教材映画一覧

（各巻16ミリカラー，5分，日本シネセル社販売）

巻	題名	プリント価格
第1巻	これはかえるです ——「こそあど」＋「は〜です」——	30,000円
第2巻	さいふはどこにありますか ——「こそあど」＋「が〜ある」——	〃
第3巻	やすくないです，たかいです ——形容詞とその活用導入——	〃
第4巻	なにをしましたか ——動　詞——	〃
第5巻	しずかなこうえんで ——形容動詞——	〃
第6巻	さあ，かぞえましょう ——助　動　詞——	〃
第7巻	うつくしいさらになりました ——「なる」「する」——	〃
第8巻	きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——	〃
第9巻	かまくらをあるきます ——移動の表現——	〃
第10巻	おかねをとられました ——受身の表現1——	〃

（第1巻〜第3巻は，文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリール21,000円，3/4インチカセット20,000円）

1976—1977
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword
Outline of Research Projects from April 1976 to March 1977
The Descriptive Study of Modern Japanese Grammar
A General Survey of Modern Japanese Vocabulary
A Sociolinguistic Study on Japanese Honorifics
A Stylistic Study of Modern Japanese
Comparative Study on the Variations of Language Behavior Between Various Social Groups
Linguistic Sociological Study on the Kinship Vocabulary of Japanese Dialects
Study on the Physiological Process of Pronunciation
Information Processing in Visual Pattern Perception and Reading
On the Taping and Transcription of Japanese Dialects
A Preliminary Study of Grammar of Dialects
Basic Study on the Relation Between Language and Social Structure
Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji Period
Study on the Relation Between Acquisition of Word Meaning and Cognitive Development in Children
The Analytic Study of Language Data by Computer
The Lexical Study on Works by Sôseki and Ôgai
Study on the Writing System of Contemporary Japanese
Statistical Investigation of High School Textbook Vocabulary
Contrastine Linguistic Study of Japanese
A Study of Fundamental Vocabulary for Japanese Language Teaching
A Study of the Current State of Japanese Language Teaching
——Contents and Methology——
Others
General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO